

小田原史談

第239号

 発行所 小田原史談会
 小田原市東町 1-21-18
 平倉方 TEL (34) 8363

報徳の伝道者②

安居院庄七のこと

青木 良一

「報徳先生」

安居院庄七が亡くなったのは文久三年(一八六三)八月十三日のことだった。今から百五十年も前になる。ところは遠州浜松宿、享年七十五。生まれは相模大山の麓、秦野であった。

安居院は秦野では「あぐい」というが、遠州では「あごい」と呼んでいるようだ。またときに「報徳先生」「報徳翁」と称された。「安居院先生頌徳碑」には、「先生姓は藤、諱は義道、相州の人。字は蘆翁、乾坤斎と號す」とある。

「報徳先生」「報徳翁」と呼ばれた由縁は、「安居院先生頌徳碑」に簡明に記してある。「先生幼にして慧敏、長じて宏志有り、家を治るを屑(いさぎよ)しとせず、二宮先生に就き教えを乞い、説を聞き歎服し、自ら謂う、吾れ克く

夫子(尊徳)の道を弘めんと、遂に弟淺田氏と志を戮(あわ)せ、出遊して兼て三社永代奉樂の信徒を募る、萬人講と稱す、衆を得ること數萬、弘化四年、始めて遠州石田村に至り、神谷氏を主とす、遠近其の教えに従う、號して報徳社と曰う」(八木繁樹著「報徳運動一〇〇年の歩み」より)

右の三社万人講については、本誌二二九号に弟の「淺田勇次郎のこと」で記したことがある。庄七・勇次郎兄弟が下石田村神谷與田佐平治を訪れたとき、「二君を家に請して討論すること連日、夜を徹し、終身齋家財を興こし国を富ますこと、蓋しこの道に超ゆるものなし」(「無息軒一代記」)と佐平治が絶賛した。ときに、庄七は五十九歳。前記の「安居院先生頌

徳碑」は、佐平治の息子岡田良一郎の撰による。

安居院庄七と二宮尊徳との出会いについては秦野の井上静男氏の「安居院庄七と報徳」(『秦野市史研究』創刊号)に詳しく、安居院庄七の活動についても同氏の「遠州と故郷の安居院庄七像」(『秦野市史研究』第二五号)がある。本稿は殆どを鷲山恭平著『報徳開拓者 安居院義道』(大日本報徳社一九五三年)に拠る。

天道の為に尽す所幾許なるか

初めて「報徳先生」(二宮尊徳でなく、また佐々井信太郎氏でもありません。安居院庄七翁のことです)に会ったものは、この襦袍(うんぽう、どてら)の老人が果して先生なのか、自分は欺かれたのではないかと思つたという。すると報徳先生は「お前たち、報徳の道を慕つて私の教えを乞わんとするのは誉めてやるが、この道はもともと容易の事業ではないぞ。先ずお前たちの日常の心掛けを聞こう。かつて天道の為に尽すところはどれだけあったか」と訊いてくるのだそうである。聞かれたほうはチンブンカンブン、何のことだか黙るしかなかった。

報徳先生は時間をかけて報徳の大意を理解させたのちに初めて、各戸の家政を調査して借財償却の法案を立てた。それで、報徳

二二九号(平成二十六年十月号)

目次

報徳の伝道者②

安居院庄七のこと

青木 良一・・・1

旅のつれづれ俳句日記

劍持 芳枝・・・5

小田原の郷土史再発見

贈答品・進上品等に見る

北條家の文化財

石井 啓文・・・6

大久保家(小田原)

江戸屋敷の変遷(下)

中村 静夫・・・10

小田原の街角写真今昔③

植田 士郎・・・13

斎藤緑雨の小田原療養生活と

金澤タケのこと

中條 利昭・・・14

小田原藩淺田兄弟の敵討

「孝貞義鑑」散策(最終回)

「孝貞義鑑」散策と私

鈴木 好・・・18

小竹久成寺と三十番神堂

米光 道子・・・22

新会員紹介・・・

上町の大塔家について

脇松雄・・・24

「隠居」の大塔さん

大塔ご夫妻の話を聞く・・・

初詣案内(池上本門寺他)

第七回史談会セミナー予告

落穂集・・・

特別賛助会員・・・

28

27

25

24

23

22

18

14

13

10

6

5

1

先生の演説は当時「御理解」といわれた。説教とか法話とかお談義という意味である。

「その『御理解』に当つては床の間を背にして正席につき、明朗な語音で勢いよく力のこもった説き方で、近く譬えをとつて易々と呑み込ませ、又深くは天命至上説に結ぶ奥の院も開帳される。或いは泣かせ或いは笑わせる活殺自在で、聴者の腸のドン底にまで透徹せしめる行方、故にその教えを受けるもの遊惰なるはよく勤め、奢侈(しゃし)なるはよく約束し、貧者には富むべく励まし、富者には財を譲るべく諭し、その他荒蕪地を拓き龜田(そでん)を改良して地味を養うこと」を説いたとは、『安居院義道』(鷺山恭平)の記するところである。

一所不住の人

報徳先生は、農繁期となれば多く浜松の商業地に足を入れ、農閑期となればまた出立して農村に足を留めた。何れもその地の門人宅を根城として数日をかさねるのだ。

その旅姿は紋付の羽織を着用し、鮫紋の脚絆を用い、草鞋(わらじ)穿き、一人の伴男に両掛を担わせて調度品を搬ばせた。何の事はない山々勧化という風采であつたという。

報徳先生に財布の必要はな

つた。日常に使用する品々は行く先々で提供されるし、往来は徒歩で行くからだ。『安居院義道』(鷺山恭平)はさらに、行く先々の人たちが時季に応じたものを用意してくれるから、報徳先生には着る物も自前のものは要らなかつたという。

家なくて住所不定というのは胡散臭くなるが、一所不住は行くところなべて家である。天地をもつて家とするところから、水戸の南蘋は報徳先生に「乾坤斎」の号を選んだ。一所不住であれば、持ち物は少ないほうがいい。木綿の手織物が多くしかもそれを擦り切れるまで着るから数は要らなかつた。冬はあまり羽織を用いず、天鵞絨(てんがじゅう。ビロードのこと)襟の袷天で押し通した。

これを「安居院先生頌徳碑」の述べるところになると、「襦袍を衣て狐貉(こかく)を恥じず。強毅清貞、曠達雅淡、氣骨稜稜、眼光人を射る、是先生の風姿也」と、だいぶ高調子になる。

兼松とよ子刀自の話

報徳先生による農村復興の仕法の話は本でもよく目にするが、『安居院義道』(鷺山恭平)に載る浜松宿兼松とよ子刀自の話は珍しい。この人は横須賀町の三河屋小野次郎八の妹にあたる。とよ子刀自に大きな商家の御隠居さん

ふうに語つていたと、こうなる。

「初めて安居院先生にお目にかかつたのは安政四年(一八五七)の、私が十五歳の時でございます。ちょうど池新田の丸尾文太夫様方へ行く途中に立ち寄られたのであります。

ある時、小野家にて二宮大先生の法要を致されました。それは大先生が(浜松藩主の)井上河内守様の仕法に与(あずか)つたことからで、その関係で士族の人々がお見えになりました。その中で記憶しているのは納戸役岡本増治、井上忠治、笠原音之助のお三方、賀の関守河井十郎、(田町の)鍋屋田中五郎兵衛、(書の)松濤先生、先代丸尾文太夫、同文六等十五、六名のお客で、何れの方も袴を着しておられました。膳部は極めて質素で、ただ画と詩文とでの追善会であります。その時安居院先生は菊の插花のお手並みを示されました。

一週間の御滞在の中には囲碁を闘わされたこともあり、生け花は巧者であられました。またその間の服装は太地の袷天で地織りのヒトハ(二羽)縞(じま)ビンロウ(ビロード)の襟を付けた粗末なもので、一回も羽織を被たことは見掛けませんでした。お人柄は厳格な方で、酒を飲まぬ、菓子も上等物を出せば叱る、また火鉢の火炭の取扱いについても叱られ

るといふほどでした。

池新田へは轎(かこ)でお送りしましたが、轎布団を二枚入れようとすると、十月中頃の薄ら寒い時でありましたのに用いられませんでした。かかる面は万事簡素で無造作の方でございました。」

往来一札之事

報徳先生はひな型通りの「送り状」を懐に入れていた。

往来一札之事

一此庄七と申者代々天台宗にて拙寺檀那に紛れ無く御座候處、今般心願に付諸国神社佛閣巡拜の為罷り出候處、若し行き暮れ候はば一宿仰せ付けられ下さるべく候、萬一途中にて相煩ひ病死仕り候はば此方へ御知らせ下され候様願上げ候、為后日仍如件

相州大住郡曾谷邨

妙相寺(印)

安政二乙卯年四月

諸國御寺院衆中

これに曾屋村(秦野市曾屋)名主彌一郎の「邨々町々御役人衆中」宛て添書きがある。曾屋村妙相寺は報徳先生の菩提寺である。弟の浅田勇次郎が伊勢で客死したのが嘉永四年(一八五二)十月のこと、報徳先生は自らも旅先で亡くなることを覚悟して郷里の妙相寺に送り状を求めた。それが安

政二年(一八五五)四月、六十七才のときだった。

死去の一事は旅先きの事

八年後の文久三年(一八六三)八月、報徳先生は浜松在の小松(浜松市)の袴田勘左衛門方にて発病した。浜松へ行きたいと望んだため、浜松宿田町の門人鍋屋田中五郎七方の隠居所(現、りそな銀行浜松支店の所在地)へ入って療養を試みたが、手当ての甲斐なく、八月十三日午の刻(午後0時)に亡くなった。報徳先生は最後まで口に道徳の言葉を絶たなかったという。

死去の一事は旅先きのことであったので葬儀の手続きは中々面倒だったが、漸く社中や町内の人々の斡旋によつて滞りなく済ませ、田町の玄中寺に埋葬した。法名は安居院仁譽弘道集儀居士。面倒な手続きというのは次のようなものだった。当時は現在以上に書面主義の時代だったから、頻繁に書付を差出した。その書付(写し)が五通も残っている。

町方役所への届け

まず、「乍恐以書付御届奉申上候」と、浜松宿田町の町役人が町方の役所に差出したのが三通。一つ目には八月九日の日付がある。「昨八日、町内年寄中村藤吉方に逗留を御願い申し上げま

した報徳翁こと庄七義、昨夜俄に病氣差し起きまして、町内の木村玄斎に頼んで薬用致し、種々介抱しておりますが、老人のことゆえなんとも助命すること難しいため、この段御届け申し上げます」というものだ。「昨夜俄に病氣差し起きまして」とは事実ではないが、このように書くしかなかったのだろう。

日付はないが、たぶん間を置かずに二通目。「去る九日に申上げました報徳翁こと庄七義、病氣と御届申し上げましたが日増しに重くなり、木村玄斎が別段心配して薬用致しました。猶また町内の(小野江)善六の里方で当国森町の勘左衛門を呼び寄せて一同介抱しておりますが、殊の外大病ですので、この段御届け申し上げます」。

そして、八月十三日付の三通目は次のように書付けられている。「右庄七義、追々病氣重くなり養生叶わずして今午の刻に死去致しました。親類森町の勘左衛門より御当所で葬つてもらうようお願い出でましたので、同人より引き請けの一札を請け取った上で、庄七が(「万一何方にて死去仕り候共其所の仕法に葬い申すべく候」という)送り状を所持しておりますから町内玄忠寺の境内を借り請けて手輕に葬りたいと存じます。この段御伺い申し上げます」。これに

は医師立合の宿駅書を添えてある。

町の庄屋と寺への書付け

役所への届けのあとに、浜松宿田町の庄屋と玄忠寺へそれぞれ書面を送らなければ埋葬できなかった。いずれも八月十三日付である。

勘左衛門から庄屋への書付けは、「(略)右庄七義、代々天台宗曾谷(屋)村妙相寺の旦那であります、当所に於て町内の玄忠寺へ頼んで手輕に土葬を取り計らえますよう御頼み申し上げます。庄七義、病死に紛れなく、右同人に付いては御町内へ毛頭御世話をお掛け致しません」というもの。勘左衛門の頼みを受けた町役人から玄忠寺宛ての書付けは、「(略)貴寺へ御頼みして死骸を土葬にしたい旨を右親類森町の勘左衛門が頼みますので、私共の取計を以て片付けますから、后日如何様の六ヶ敷義が出来致しますしても私共が引き請け、貴寺へ少しも御世話をお掛け致しません」とある。

そして、玄中寺から寺社御役所へは、埋葬「御伺」と「御届」の二通が差出されている。

このように報徳先生が玄中寺に埋葬されるに至るまで、幾人もの人たちの手間がかかっていた。決まり文句とはいえ、「御町内へ毛頭御世話をお掛け致しません」

とか「后日如何様の六ヶ敷義が出来致しますしても私共が引き請け、貴寺へ少しも御世話をお掛け致しません」という保証文言がないと相手を納得させられなかったのだろう。

葬儀始末

埋葬後、九月二十六日に本葬が執り行なわれた。仏参できなかった者には十月二十九日付で、浜松田町の駿河屋忠兵衛、棒屋中村藤吉、田中五郎七、小野江善六、小野江善八、それに領主井上河内守家中の岡本嘉内が連名で「葬儀始末書」というものを送った。

それによると、本葬で焼香した面々は、浜松宿在下石田村(浜松市)の神谷與平治・久太郎をはじめとして、掛川在倉真村(掛川市)の岡田佐平治、影森村(掛川市)の内田桂助(啓助)、成瀧村(掛川市)の平岩佐兵衛、横須賀在池新田村(浜岡町)の丸尾文太夫、相良在平田村(相良町)の矢部與左衛門、地頭方村(相良町)の原崎茂吉、森町の山中利助、気賀町(浜松市)の武田兵左衛門、金指村在都田村(浜松市)の金原孫四郎、駿州からは府中在大内村(清水市)の荒木由藏等々、名前の挙がっているだけで三十六ヶ村(町)七十六名、それに加えて浜松社中の人たちが参列した。「葬儀始末書」には、「寺へは

永代茶湯料として金十両を浜松その他の惣連中より奉納した」とあり、遺品については候文で次のように記されている。「右が済んでのちに御所持の荷物を一同立会の上で取調べましたところ、兼て執行の御書物並びに筆道、御掛物其の外文房諸道具、文鎮、筆墨、石印、肉池類、且また永(知楽)書の一冊、並びに南蘋書の二葉、そして松濤書が数葉ございました。御召物の儀は兼て殊の外御節儉で御弟子衆へも御教訓なされており、殊の外鹿服(そふく)を用いられましたので一向に御所持なく、送って差上げる程にも至りません。唯だ五、六枚ございますので猶又封印して紋屋(小野江)善六方へ慥(たしか)に預かって置いてもらいますので、そのように御承知下さい」とあって、遺品は主に書物と筆道のもので、着る物は形見分けするほどはなかった。

御所持之品

遺品はどんなものかもっと知りたいと思つたところ、『安居院義道』(鷲山恭平)には「安居院様御所持之品」という項目があった。

(一) 書物之部

「天命拾箇條」「暮方取直し日掛繩索中勘帳」をはじめとして、「一元混沌開闢圖書」「天徳無尽現量鏡」等々、報徳仕法に親しん

でない私には内容の見当がつかない。それで「天徳」とはなんぞや、天地人の天徳かと思つたが、これは利息のことをいうようだ。「天徳無尽現量鏡」について『二宮尊徳全集』では、「利率によって相違する種々の場合を示したもので、日光仕法雛形の(甲)に属するもの」と解説している。

「天徳」といえば「地徳」がある。二宮尊徳は天保三年(一八三二)に桜町の陣屋で「天徳無尽現量鏡」のほかに「地徳開倉積」を著している。報徳先生の遺品のなかにも「地徳積立編町田氏上書相馬家手簡」というのがある。

そのような原理的なもののばかりでなく、「常州眞壁郡青木村取扱一件帳」「西大友村藤曲村御仕法一件之寫」といった仕法の具体例もある。また「二宮先生御説徳聞書略」「塔之澤にて聞書写」「於日光御説徳聞書」や「報徳書取集」「報徳問答録」等の聞書類・書取類があった。

報徳先生自著の「報徳作大益細伝記」は三冊。他には弟の浅田勇次郎についての「浅田有信先生秋夕傳」や万人講時代の「關川橋永続仕法帳」「三社燈籠萬人講帳」「同本立帳 秋葉山御鳥居信心講」「大神宮永代太々神楽萬人講」の書類もあった。これらは行李の底にしまっておいたのだろうか。

(二) 別口雜書之部

この時代に荻生徂徠の「素書國字解」や林道春語解「博覧古言」がよく読まれ、それで報徳先生も手許においていたのだろうか。法帖類は幾つもあり、「朱子章董其昌法帖寫」は、当時流行っていた法帖類か。趙子昂や文徵明の名のある法帖もある。「文天祥墨帖字本」もあるが、報徳先生の書の師匠永知楽は水戸の人だから、これはその影響か。「草書淵海」は書道の辞書というべきものらしい。篆隸草の本は何冊もあり、細井広沢の「十體千字文」に法帖「廣澤書」そして、「筆道極意(三十七冊)」「書道入門盟書」と「永知楽手本」「永知楽軸物」「算法書」は和算の本だが、おや、「易经」もあるぞ。

(三) 衣類之部

報徳先生は着るものには無頓着で、行く先々で用意してくれたもので済ませていたという。確かに「木綿手織単物」「同萬筋単物」「同藍微塵單物」「同はけ縞(じま)単物」「藍微塵袴(あわせ)」「萬筋袴」と、木綿の類ばかりで、そのうち袴は二枚だけだ。

羽織は「藍萬縞袴羽織」「唐木綿々入羽織」「木綿小紋單羽織」の三点、うち綿入れは一。半天は「藍立縞半てん」「同縞古半天」袴は「小倉縞袴」のみ。これに「木綿男帯」「紺小倉帯」と「藍格子

縞片掛」「浅黄木綿襦袢(じゅばん)を加える。その下は「股引(三具)」「下帯(二筋)」。そして「手拭(九筋)」と「腕拔」一つに「頭巾」ひとつ。足の方は「麻裏草履(二足)」「足袋(三足)」といった具合である。

普段は財布を用いなかったそうだが「木綿財布」「皮巾着」がそれぞれ一つあった。「花挟み」と「鋸(小二個)」は、とよ子刀自の話にあるように、生け花巧者の報徳先生らしい。先生は酒を飲まぬ菓子も上等物を出せば叱る人だったが煙草は吸っていて、「喜世留(四本)」「紙烟草入(二個)」「同下け烟草入」を所持していた。「木綿座蒲團(三枚)」「毛氈(天一枚、小二枚)」は、これらを伴の男に担がせて村々を廻つたとは思えないが、遺品にあった。風呂敷は当時の必需品で、報徳先生も「縞風呂敷(三個)」「更紗風呂敷」とある。

その他「大筆(七本)」「小筆(二十八本)」「墨(大小十二個)」「大硯(但箱入)」「小硯(大小二個)」と「唐紙用紙之類」の文房四宝。小筆が二十八本とは、禿びたものでも捨てないで使っていたのだろうか。さらに細かく挙げれば、「唐金牛水入」「古銅綱引筆架」「古銅文鎮(二個)」、これに「矢立」「蒔絵短冊箱」「石印(二十二)」「朱印」「肉池(三個)」がある。「曲子」という

のは、さて何だろう。

あと、「元三大師簽(せん)(箱本一卷添)」は疫病除けで、「萬人講合印(二本)」と「鎌(三挺)」羽箒(四本)もあるが、これで全部、これっきり。最小限の衣類を別にすれば、家財道具らしいものは何もない。お金も少し。「金五兩(御所持之分)」と「金二兩(古金)」なり。僅かだったと言っている。

明治の雑誌『報徳』

はじめに、本稿は殆どを鷺山恭平著『報徳開拓者 安居院義道』に拠ると記したが、同書中に「安居院様御所持之品」(相模草山貞胤寄報徳四十一號)とあることから、八月末日、雑誌『報徳』を報徳博物館で閲覧させて頂いた。

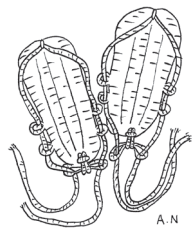
右の雑誌は明治二十五年三月から三十六年九月まで続いた月刊『大日本帝国報徳』で、発行は静岡の報徳学図書館。主なる人は静岡報徳社々長の中上喜三郎。報徳先生安居院庄七の記事もありここにあって、『安居院義道』(鷺山恭平)もこれから多くを引いている。

ところで、報徳先生の農事改良法である「報徳作大益細伝記(田畑作立大益秘伝)」をはじめに実行したのは、下石田村神谷與平治である。彼は先生が病むに至ると看病怠らず、「其の病勢の盛んなるに當て厠(かわや)に行くこと幾十

回、君之を負ふて出入す、其の親切懇到なる慈母孝子の間と雖も、及ばざるものありと云ふ」(『報徳』第五十三号)とあって、報徳先生最期の傍らにはこのような人もいたと知る。

また、相模大住郡南秦野村平沢に草山貞胤という斯道に熱心な人がいて、「相州における報徳社の巡回教師」であるという(小田原報徳二宮神社創建時の社掌)。彼は『報徳』に「安居院義道翁」を連載し、それには報徳先生の系図も載せており、役所への書付、葬儀始末書、御所持之品と、省みれば私は今回、草山貞胤が『報徳』に寄せた記事をどれもこれも使わせて頂いたことになる。

明治三十九年創刊の『斯民』(中央報徳会)はいわば官製の雑誌で、野の人、報徳先生安居院庄七翁には関心がなく、一編の記事すらない。報徳運動の流れは、襁褓の翁を置き去りにしてあらぬ方向へ行ってしまった。



旅のつれづれ俳句日記

劍持 芳枝

人生は旅、私はこの言葉が大好きで何時も心の中で温めている。俳句の友人達に誘われたり誘ったり、楽しい旅の喜びを味わったものである。今回も過ぎし日の思い出の旅となってしまうが、初秋の二泊三日の山陰旅行を綴ることにした。

一日目は京都より山陰線で天橋立へ。昼食をすませタクシード傘松公園のケーブルで展望台へ登った。天橋立の美しい風景を目の当たりに見て感激も一入だった。天橋立をあとに城崎へは二時間もかかった。駅からマイクロボスで宿のリバーサイドホテルに着いた。情緒ある温泉街を歩いてもみたかったが夕食となり、蟹や海老、新鮮な魚料理がとても美味しかった。

行く秋やワイングラスの頸長き

二日目の朝、城崎から鳥取へ、タクシード砂丘へ案内してもらった。見渡す限りの白い砂丘で駱駝の親子と一緒に写真を撮ってもらったり、年を忘れて楽しいひと時だった。二時すぎには又電車に乗るため米子で特急に乗りかえ、宍道湖を右手に眺め玉造温泉に着いた。タクシードこんや別館へ。玄関で抹茶をいただき、素晴らしい名庭を目の前に見られる部屋に案内された。夕食後露天風呂に温まり眠りについて。

翌朝九時にタクシードを頼んであるのでロビーで待っていた。驚いたことに外車のキャデラックだった。先ず松江城へ。黒い木造の城で徳川直系の城だけあって中々風格があった。武家屋敷、小泉八雲旧居記念館、月照寺を見学。松江をあとに出雲へ向かった。出雲そばで名の知られた荒木屋さんで、名物そばを美味しくいただいた。出雲大社の雄大な社に流石日本一だなとうやうやくと拝礼した。この年の四月にオープンした出雲ドームを見学、最後はワイン工場のショッピングセンターで又お土産を買い、荷物がだんだんに重くなってきた。あまり乗ることのない外車に気分よく乗せてもらい、運転手さんに丁寧にお礼して別れた。

岡山で夕食をすませ疲れもなく元気に家路に向かったのである。

暮れなずむ海辺の道や月見草

小田原の郷土史再発見

贈答品・進上品等に見る北條家の文化財

石井 啓文 ひろ ふみ

今年のNHK大河ドラマ「軍師官兵衛」では、第一回の冒頭に小田原合戦が映し出された。軍師として和平交渉に臨む官兵衛の正念場を暗示したのであろう。

この和平成立後、北條氏直は謝礼として官兵衛に太刀と法螺貝・吾妻鏡を贈っている。

この三点は貴重な文化財として現存し、私たちに四百有余年の歴史を伝えている。本稿ではこうした贈答品等から判明する北條家の文化財を探訪してみた。

北條家の文化財

一口に「北條家の文化財」と言っても、彫刻から絵画・和歌・刀剣等武具・茶道具・什物・唐物等多種多様である。

箱根湯本の早雲寺史研究会編『早雲寺』(平成二年刊)によると、「北條家菩提寺〔早雲寺〕の重要な什物が秀吉によって召し上げられ、京都に運ばれてしまった。その間の事情を『早雲寺記録』は、次のように記している。

一 今大徳寺ニ所在之五百羅漢百幅閣次平ノ筆、元来ハ建長寺ノ什物、又一説ニハ寿福寺ノ什物、運庵・虚堂・大應自讃ノ像三幅ハ元来天源庵ノ什物、陸信仲十王ノ絵。右ハ古来当山之什物ニテアリシヲ秀吉京都へ御持参、五百羅漢ヲ天瑞寺へ御寄進、其后天瑞寺より大徳ノ方丈へ寄進也。運一虚一大ノ三幅ニ白地ノ金欄ノ陣羽織ヲ添テ大徳寺へ寄進、十王ノ絵同断」

この記録によると、「これら早雲寺の什物も、本来鎌倉の禪刹にあったものらしい」という。

このように戦国時代は、勝者によって文化財が持ち去られている。戦国武将たちの「倣い」とも言えるのであろう。

下表に、北條家から贈答等に使われた代表的文化財十二点とその所持者の変遷を示した。

島田一門の刀剣と

小田原狩野派の絵画

「桐鳳凰蒔絵太刀①」は、二代

贈答品・進上品等に見る北條家の文化財

no.	種類	名 称	作 者	所蔵者変遷	現・所蔵者
①	太 刀	* 桐鳳凰蒔絵太刀	島田綱広	島田綱広→北條氏綱→天文7年(1538)鶴岡八幡宮	鶴岡八幡宮
②	扇	扇10本	狩野派	?→北條氏照→永禄12年(1569)伊達輝宗	不 明
③	扇	扇	狩野派	?→北條氏政→天正6年(1578)足利義氏→里見義広妻	不 明
④	什 器	唐椀1流・他3品	中国製	?→北條氏康→永禄8年(1565)本光寺(小田原城内)	不 明
⑤	楽器他	唐之磬・他7品	中国製	?→北條氏康→永禄10年(1567)香林寺(板橋)	不 明
⑥	地産品	江川酒・蜜柑	江川家	江川家→北條氏政→永禄12年(1569)上杉謙信	—
⑦	太 刀	* 日光一文字	不明	二荒山→早雲庵宗瑞→氏直→天正18年(1590)黒田如水	福岡美術館
⑧	法螺貝	白海螺(北條白貝)	不明	?→(北條家代々か)→氏直→天正18年(1590)黒田如水	福岡美術館
⑨	軍記物	* 吾妻鏡(北條本)	不明	?→北條氏直→黒田如水→長政→慶長9年(1604)家康	国立公文書館
⑩	絵巻物	酒傳童子絵巻	狩野元信	北條氏綱→氏直→督姫→池田家(姫路→鳥取)→入札	サントリー美術館
⑪	絵巻物	* 後三年合戦絵巻	飛騨守惟久	? 鎌倉→氏直→督姫→池田家(姫路→鳥取)→入札	東京国立博物館
⑫	和歌集	藤原定家真蹟歌集	藤原定家	? (北條家代々か)→香沼姫→(督姫)→徳川家康	不 明

(注1) 名称欄*印は、国の重要文化財指定である

(注2) 所蔵者変遷欄～印は、北條家代々。「入札」は、大正8年6月2日、因州池田侯爵家御蔵品入札である

(注3) 督姫池田家再嫁は、文禄3年(1594)である

北條氏綱が鶴岡八幡宮再建に際して島田正広(後、綱広)に鍛造させたもので、一昨年の東京国立博物館「大神社展」で展示され、私は拝見してきた。

「奉納 八幡宮御寶殿

北條氏綱左京太夫氏綱

天文七年戊戌八月二日

相州綱広・作

桐鳳鳳蒔絵太刀」

銘の説明書きであるが、この時の刀工・島田正広は駿州島田出身で、氏綱から「綱」の一字を賜り「綱広」と改めた。

この島田一門は、綱広以前に定広(永正八年)定吉(同十一年)義助・信定(同十八年)泰春(大永二年)等、小田原での作品が確認され、綱家(天文七年)の短刀も小田原城天守閣に所蔵されている。綱家以降の一門も北條家に仕えていたことも推定されている。次に、小田原狩野派とは造語と思われるが、『小田原市史』は東国における狩野派史料十七点を表に示している。その内最も多いのが、扇子の七点である。

八王子城主北條氏照が永禄十二年五月、伊達輝宗に贈った狩野派の扇十本(②)と、天正六年二月、足利義氏が北條氏政進上の狩野派の扇(③)を、里見義広の妻に遣わした二例を示した。

唐物と地産品の江川酒等

唐物とは唐からの請来物。北條氏領国における唐人の足跡から、大陸(中国)と交易していたことが知れ、小田原市の発掘調査ではそれ程珍しくはない、と言われている。唐物進上品の代表的二例を取り上げた。

「唐椀④」は永禄八年五月、三代氏康が本光寺(小田原城内に創建)に唐椀一流他を寄進している。「唐之磬(けい)⑤」も、やはり氏康が永禄十年正月、香林寺(市内板橋)が売却した什物を買戻し、同寺に寄進したもので、磬とは中国古代の楽器である。寺院では仏具としても用いられ、釣鐘の代用が考えられる。



写真1 唐之磬

では何故、氏康は両寺に寄進しているのだろうか。

本光寺は、氏康が弟為昌(玉繩城主で二十八歳で死去)の菩提寺として建立。香林寺は、氏康母君養珠院の開基である。

いずれも『小田原市史』が文書

を示し解説している。

そして、地産品(⑥)は文化財とは言えないが、贈答品として「江川」が名酒として知られていることから取り上げた。四代氏政書状に多く、上杉謙信への贈答品とした一例を示した。

この江川は、後の葦山代官家で北條家に仕官していたという。当時は造り酒屋で、『寛政重修諸家譜』の「江川」の項「吉茂(始め英元)」の記述に、「早雲に仕へ忠功を励す。早雲もまた吉茂が製するところの酒を愛し「江川」と名づく」とある。

早雲の命名は兎も角(吉茂七歳の時、早雲死去)、『信長公記』では信長に贈り、『松平家忠日記』でも家康に贈ったことが判明し、『太閤記』では豊臣秀吉の「醍醐の花見」で、酒の銘柄書上げに「江川」を記している。

また、『里村紹巴紀行日記』等では名酒として記述し、文書では氏政の贈答品が多い。

そして永禄二年(一五五九)三代氏康時代作成の『小田原衆所領役帳』の伊豆衆に、「江川 卅貫文 豆州 立野」がある。

その校注に「江川」は「江川兵衛太郎か、当時浮役寄合衆で、「立野」は下田町立野」とある。造り酒屋の次男か三男が、仕官していたことが考えられる。

黒田官兵衛への贈答品

『大三川志』(松平頼寛・著)に、小田原合戦の和平交渉は天正十八年六月八日に始まり、黒田官兵衛は小田原城中に酒二樽と糟漬魴十尾を贈り、城中からは御禮として炮薬十貫目と鉛十貫目が贈られた、と記している。

炮薬と鉛の返礼は、降伏を示唆していたのであろう。

そして和平成立後、冒頭の贈答品三点が贈られている。

まず太刀『日光一文字⑦』は、『名物三作』(黒田家伝来古文書)が記している。

「日光一文字、無銘長サ式尺式寸四歩。無代、日光権現ニ納リテ有シヲ小田原北条早雲長氏申落シテ所持ス。氏綱・氏康迄伝ル。小田原陣黒田如水老暖和タン(和談)ニナリ依之為礼此刀並東鑑之正本・白貝ヲ遣ス(後略)。」

早雲が、日光権現(当時は二荒山権現社)から貰い受けたという。

官兵衛の祖先は、近江黒田村(長浜市木之本町)と播州黒田庄(兵庫県西脇市)出身の二説があるが、いずれも官兵衛の祖父が備前福岡(岡山県瀬戸内町長船町福岡)に移住し、その後、姫路城主になったという。

この備前福岡が備前刀の産地として知られ、鎌倉時代に「福岡

「一文字派」と呼ばれる刀工集団が活躍し、彼等の作品が二荒山に奉納され、後に「日光一文字」と称されたのであろう。

福岡美術館所蔵で、国の重要文化財に指定されている。

因みに、関ヶ原合戦後、黒田官兵衛は筑前を与えられ、博多の隣接地福岡に城を構え、その地を「福岡」と改め今日の九州・福岡の始まりと言われている。

次の法螺貝(⑧)は、所蔵する福岡市美術館の資料には、「北条白貝」とある。小和田哲男著『黒田如水』(平成二十四年一月刊)も次のように記している。

「如水は、あらかじめ氏政・氏直父子に酒二樽・粕漬の鮎を贈り、無刀・肩衣袴の姿で小田原城に入り、氏政・氏直父子と対面し、開城勧告を行っている。氏政・氏直から如水に返礼として「日光一文字」の太刀、「北条白貝」それに『吾妻鏡⑨』が贈られた。」

「白貝」は皿貝とも言われる二枚貝(アサリやハマグリ等)である。前述の『大三川志』は、次のように記している。

「如水肩衣袴を着し一刀をも帶せず城に入り、氏政に謁し和融の事を議し、氏政父子許諾し日光一文字刀及『東鑑』の書・白海螺と云陣螺を如水に與ふ。」

この「一刀をも帶せず」をNHKは強調したのであろう。

ただ、ここには「白海螺と云陣螺」とある。「北条白貝」は後世の造語ではないか、と福岡市美術館に問い合わせてみた。

回答は「福岡市博物館・研究紀要」創刊号の「黒田御家御重宝故実」(門野恵・筆)であった。

「一、北条白貝(貝) 日本三ツ之名貝と言也。北條家相伝之重宝也。小田原陣之時、氏直より此貝・日光一文字・東鑑三種来ル。御家譜二委敷(くわしく)出たり」

確かに「北条白貝」とある。『黒田御家御重宝故実』は貞享五年(一六八八)から宝永四年(一七〇七)頃の成立という。江戸時代の造語と言えよう。

『吾妻鏡』については、小和田哲男(前書)の解説がある。

「この『吾妻鏡』は現在、国立公文書館内閣文庫に所蔵されているが、『吾妻鏡』諸本の中で一番の善本とされ、『新訂増補国史大系』の底本に使われているのである。」

慶長九年、官兵衛の嫡子長政はこの『吾妻鏡』を家康に献上、江戸城紅葉山文庫に所蔵され、現在は国の重要文化財に指定されている。

督姫が関わる文化財

最後に家康の二女で、氏直に嫁した督姫(良正院)が関わる三点について述べておく。

『酒伝童子絵巻⑩』は絵を古法眼と呼ばれた狩野元信(小田原狩野派とは関係はない)が描き、詞を上巻は前関白太政大臣近衛尚道、中巻を法務大僧正定法寺公助、下巻は二品法親王青蓮院尊鎮で、当代を代表する京都の文化人によって制作された。

その成立過程は、詞書(ことば書き)の筆者近衛尚道の日記『後法成寺関白記』から判明する。

大永三年九月十三日の條に、尚道は北條氏綱のもとに應じて詞書を書き、氏綱はその礼として千疋を贈っている。

享祿四年閏五月二十一日、三条西実隆は、この絵巻の奥書の揮毫を頼まれ、同月二十八日に認め、翌六月二十二日、「外郎被官卯野」に渡している。

この氏綱の使いをした外郎被官卯野とは、小田原外郎家初代宇野藤右衛門定治である。

氏綱の望みによって作成された『酒伝童子絵巻』は、外郎家の將軍家を始めとする幕府要人・当代一流の文化人たちとの人脈の中で生まれたという。

そして、氏綱は大永七年七月に正室・養珠院に先立たれると、後妻に近衛尚道の娘を迎えている。

氏綱と尚道の結びつきは、宇野定治の商取引のみならず、京文化の伝達者の役割も果たした、と『小田原市史』は推定している。

また、北條家は源義家が奥羽の豪族清原氏を討伐した様子を描いた『後三年合戦絵巻⑪』も所蔵していた。(小田原市史)

「代々北條家に伝へり、神君御時、姫君北条氏直へ嫁し給しが御離縁にて帰らせ給ふ時、かの絵巻ものを携歸りたまふ。その後池田家松平因幡守へ嫁し給ふ時、その画卷をたづさえ給ふ」(『訂正増補古画譜』)

氏直に嫁した家康の娘督姫が氏直他界後、北條家より持ち出し、池田家に再嫁した時に持参したと伝えている(『小田原市史』)。

さらに『池田家履歴略記』は、前述の『酒伝童子絵巻』も同様に持参したことを記している。

以上は『小田原市史』の要約であるが、この北條家秘蔵絵巻物二巻の後日談に出会った。

その後の二絵巻物

高橋箒庵(そうあん、本名・義雄)著『東都茶会記第七輯』収載の「名物繪巻物」が記していた。箒庵は、文久元年に水戸藩士の子として生まれ、慶應義塾卒業後、福沢諭吉のもと時事新報記者になりアメリカに渡った。帰国後、三井銀

行に入社、三井呉服店(三越)に移り、経営改革を行う。明治四十四年、五十歳で実業界を引退、文筆と茶道三昧の生活を送り、昭和十二年に他界している。

前書は、大正八年六月二日に行われた因州池田侯爵家(鳥取藩池田家)御藏品入札会を箒庵が主催し、出品された前記二絵巻について述べている。

この二絵巻物は、「一は歴史的、一は美術的に余等に多大の興味を興ふる」とし、特に『後三年絵巻』については「彼(筆者・飛騨守惟久)の遺筆中無類の傑作と云はざる可からず、(中略)武者の面貌・傳彩・屋臺・雲煙・樹木の筆致、古土佐風に於て別に一機軸を出し、氣骨を具へ威嚴を帶び、其修羅場を描寫するに當りては、人をして一見悽愴の感に堪へざらしむ」と絶賛し、池田家と箒庵等の判断で親引にされたという。

確かに同絵巻は合戦絵巻では最古と言われ、国の重要文化財に指定されている。

では、何故この二絵巻物が姫路から鳥取に移っていたのか…。

姫路城主池田輝政と再婚した督姫の子で、次男(長男は輝政前妻の子)池田忠継が初代岡山城主であったが、督姫他界の数日後に死去、三男忠雄が継承した。

忠雄は督姫のため知恩院に塔頭良正院を建立するが、寛永九年

に死去。嫡男光仲(三歳)が家督を継ぐが、幼少のため鳥取に移封されたのである。

従つて、この移封の際に二絵巻物は鳥取に持たされたのである。ただ、督姫他界の前後に岡山城に移されていたことも考えられる。

以来、鳥取城主は督姫の系譜が明治まで続くが、入札時の当主池田伸博は、水戸出身の將軍徳川慶喜の五男であった。

大正七年十月、水戸家重宝の入札が行われた後、同家家令手塚任を介して箒庵に池田家道具調査の依頼があり、精力的に入札の準備に当たったという。この入札後、『後三年絵巻』は東京国立博物館へ、『酒伝童子絵巻』はサントリ―美術館の所蔵となったのである。

なお、『小田原市史』は「督姫が北條家より持ち出し」と記していたが、箒庵は「徳川家康の二女普字子(督姫)が池田輝政に嫁したる時、引出物として持参」と、記している。

家康所望の『定家眞蹟歌集』

「香沼女(北條氏綱の女)は氏直の内室 東照宮の姫君、督姫君と稱す」と懇交なり。常に和歌の贈答などありしとなり。香沼女は定家の眞蹟歌集を傳來せし事、北條氏没落の後、東照宮の御聞に達し、姫君

より舊好の因をもて御所望ありしかば、即ち是を獻ず」(女・姫・娘のこと)

『新編相模国風土記稿』の記述である。香沼姫が、藤原定家直筆の歌集を持つているから譲つて欲しい、と家康が督姫を介して頼み、献じられたという。

このことは『相中留恩記略』も記しているが、「定家直筆の歌集」を『玉葉集』としている。しかし、『玉葉集』に定家の和歌は収載されているが、定家他界後の版刻であり、定家直筆はあり得ない。

それにしても、小田原落城後であるから、家康は大久保忠世に頼めば良いものを、督姫を介しているところが興味深い。

ただ年月の記載がない。落城後も督姫が小田原にいた(落城翌年の八月十日に氏直の元に行くため小田



写真2 良正院督姫の墓
(京都知恩院裏山)

原を発っている)時の話であろうか。督姫と小田原は縁が深い。現在、箱根芦の湯の「東光庵」近くの薬師堂は、督姫の菩提を弔うため建立された京都知恩院塔頭良正院から、益田鈍翁が板橋の自邸に譲り受けたものという。

そこで気がつくのが、前述の高橋箒庵である。箒庵と鈍翁は茶道仲間『遠州藏帳図鑑(上下編)』(昭和十三年・刊)を共著で出版している。良正院(督姫)と鳥取池田家、鳥取池田家と水戸家を介した箒庵、箒庵と鈍翁の関係から、良正院の薬師堂を鈍翁が譲り受けたことが見えてくる。

現・薬師堂には、高松塚古墳を思わせる壁画が描かれている。「これを見ていると癒される」と言われる人も少なくない。

しかし、傷みがかなり進んでいる。貴重な文化財であり、箱根町には適正な保存を考えていたきたく思う。

なお、督姫には「毒饅頭事件噂話」が残るが、昭和五十三年の清泰院(岡山市)にある池田忠継廟の遺体発掘調査で、俗説として完全に否定されている。

督姫は家康に会うために訪れていた二条城で亡くなり、家康の命で知恩院裏山に葬られたという。現在は観光客で賑わう知恩院であるが、その裏山に督姫はひっそりと眠っている。

大久保家(小田原) 江戸屋敷の変遷(下)

― 上屋敷を中心に ―

中村 静夫

まえがき 本誌前号の大久保家江戸屋敷変遷表・同位置図及び12頁の「大久保家歴代当主」を参照しながら読んで下さい。

江戸城西之丸下(①②)

大久保家(小田原)は、初代忠世を継いだ二代忠隣(ただちか)のときに、江戸城西之丸下(①)に上屋敷を拝領したことがわかれます。それは慶長図(一六〇三)に出ているからです。これは私の推定ですが、慶長八年(一六〇三)頃から改易される慶長十九年(一六一四)まで間違いなくここにありました。

忠隣は文禄三年(一五九四)に小田原城主になりました。その子忠常が慶長五年(一六〇〇)に加賀守となり、七年頃騎西城主となっていました。

西之丸下の上屋敷は二ヶ所あり、忠隣分が約五千坪、忠常分(西之丸下角地)②が二千坪でした。西之丸下という江戸城にごく近いところに上屋敷を拝領したというのは、それだけ登城に容易である、つまり幕府の重役を勤めているというわけです。忠隣は慶長

十五年(一六一〇)に老中になっています。しかし、慶長十六年に忠常が三十二歳の若さで小田原で亡くなり、その子仙丸(後の忠職)が騎西城主としてあとを継ぎます。その後慶長十九年に忠隣が改易蟄居を命じられて、忠隣分の上屋敷は召し上げとなっていました。

そこで考えられますことは西之丸下の忠常分(西之丸下角地)約二千坪は仙丸が相続し、多分騎西城主のものとしてそのまま存在しつづけたようです。忠職は寛永二年(一六二五)に赦免され、翌年には加賀守になっております。

そして七年後の寛永九年図の西之丸下角地②に加賀守(忠職)が記載されていることから、この屋敷の継続性を想定した次第です。

大名小路南部西側(③)

次に、大久保家は寛永十九年(一六四二)図に大名小路南部西側③に上屋敷があります。その頃、大久保家は加納・明石そして唐津へと転封になりま

す。延宝五年(一六七七)、忠朝は老中になって江戸城西丸下(桜田御門之内⑥)に移るまでここにおります。

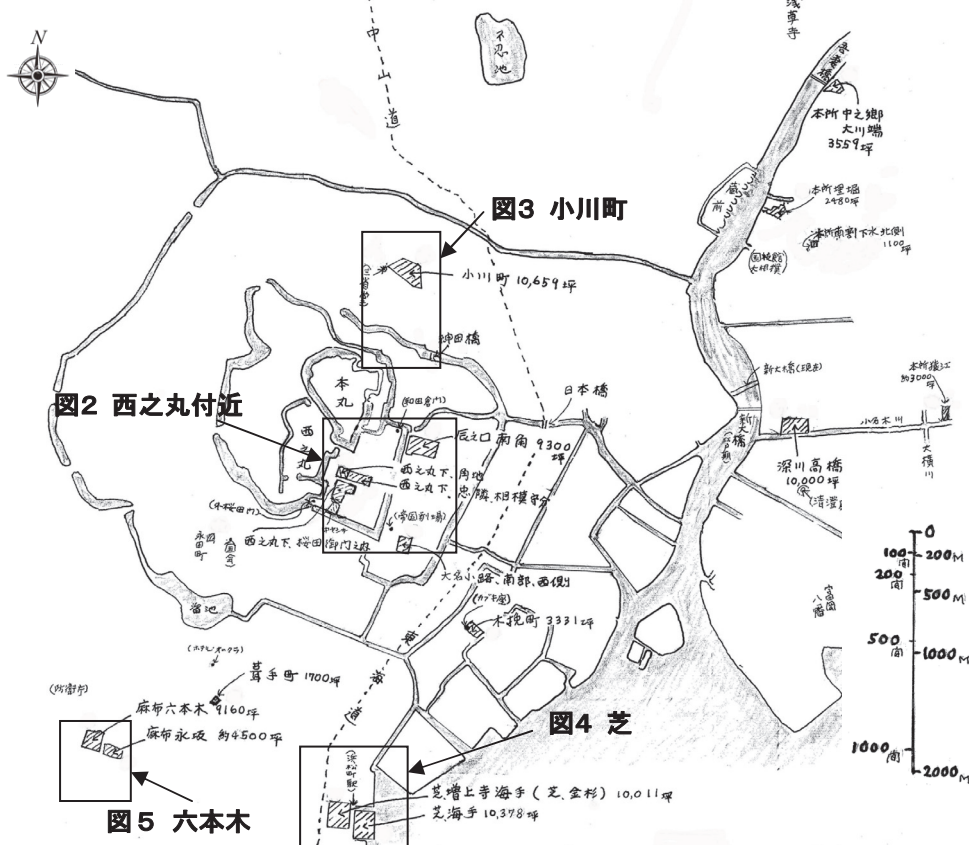
西之丸下(桜田御門之内)(⑥)

大久保忠朝は延宝五年(一六七七)に老中に就任し、この時から江戸城西之丸下(桜田御門之内⑥)

に上屋敷を拝領しました。大名小路よりはお城に近くなっています。ここは約七千坪の広さです。翌年には九州唐津から佐倉九万三千石に転じ、さらに貞享三年(一六八六)にはようやく父祖の地、小田原に戻ることができました。十萬三千石です。

中屋敷(大名小路)は旧上屋敷(大

図1 大久保家(小田原) 江戸屋敷位置図 (238号参照)



名小路南部西側③」をそのまま「唱替（となえがえ）」し流用していたようですが、その後元禄六（一六九三）西之丸下（桜田御門之内⑩）に移ったようです。

忠朝の老中在任は元禄十一年（一六九八）まで続きます。しかし、それで上屋敷を返上したわけではなく、子の忠増が若年寄を経て宝永二年（一七〇五）に老中職に就いておりますため、引き続き西丸下（桜田御門之内）⑥の上屋敷を利用しています。

小川町
(12)

忠増の老中職は正徳三年（一七二一）まででして、忠増はその年の七月二十五日に亡くなり、隠居の忠朝はすでに前年に亡くなっております。そのためか、翌正徳四年には上屋敷は西丸下（桜田御門之内）から小川町（^⑫）に移るのです。

敷地は一万六百五十九坪、そのうち預り地が三千三百七十一坪です。それは享保五年（一七二〇）の享保図でわかります。

藩主は忠増から忠方に代りましたが、忠方は享保十七年（一七三二）、四十一歳で卒してしまい、忠興の時代になります。

中屋敷は六本木で変わりました。

小川町の上屋敷は寛延二年（一七四九）まで存続、この屋敷は土

屋能登守（六・五万石）に譲られます。その譲り渡しの記録は『東京市史稿』（市街篇）に載っております。この『東京市史稿』（市街篇）は八十七巻ありますが、約四分の一はこのような武家地の移転記録です。

同資料にはこの屋敷の畳数・障子数など具体的な数が記録されており大変貴重です（左資料参照）。

小川町大久保出羽守（忠興）上ヶ屋鋪
家立具疊植木石目録

門扉但久、里共

銀鐘

一戸 但、半戸共 貳千百六十本

障子 但、半障子共 九百十式本

一、襖	但半襖共	貳百六十五本
六、疊	具半疊共	二四百七十四疊

一、疊	但	半疊	千四百七十四疊
一、諧子	大小		式百拾六

一、石手水鉢
壺ツ

一、植木 大小 品 名

一、庭石 大小 品々

右之通相改相違無御座請取申し候以上
寛延二年十二月朔日

土屋能登守内

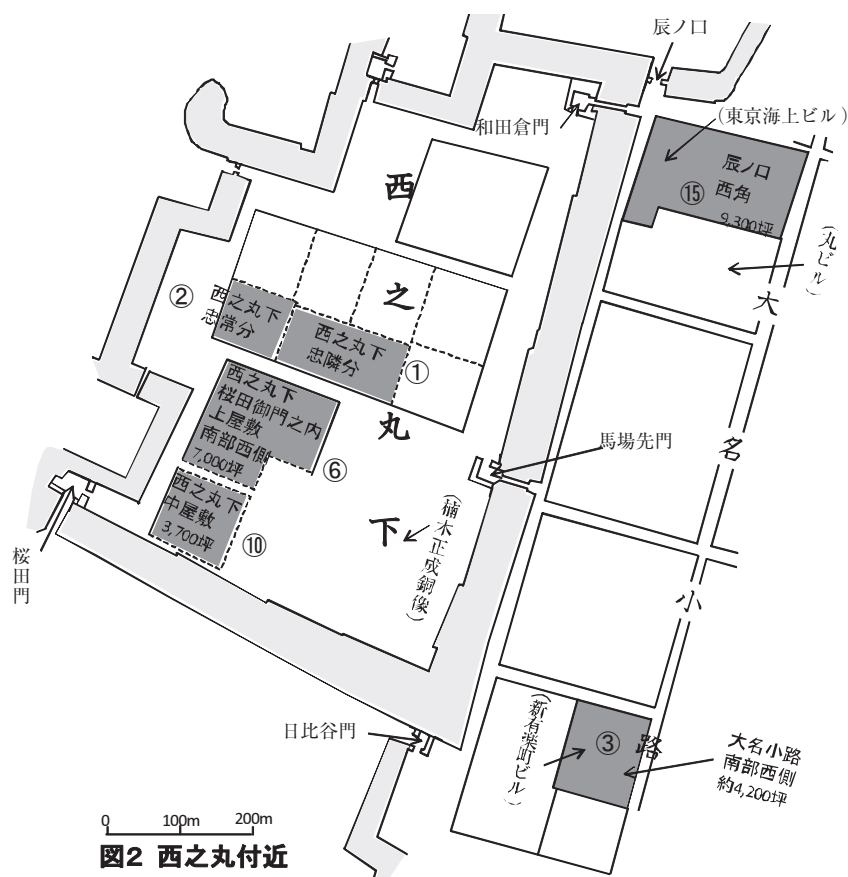
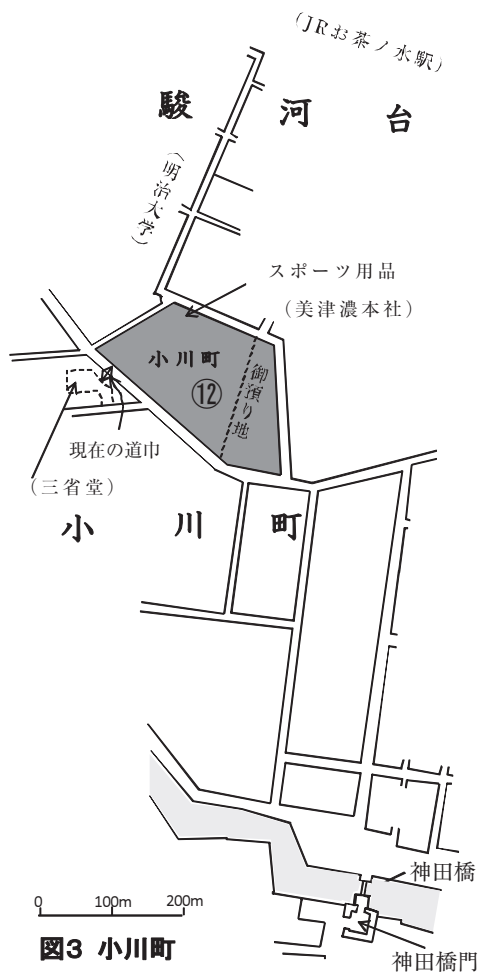
荒木弥市兵衛印

原田源左衛門印

麻布六本木 ④ から

芝海手（芝金杉築地）⑦へ

大久保家は小川町から「唱替」で、麻布六本木④を上



小田原の街角写真今昔 ③

(岡部忠夫先生のアルバムより)

植田 士郎

今回は、南町(旧十字町、幸町)を中心に新旧の写真をご紹介します。岡部先生は南町にお住まいでしたので、近所を詳細に撮影されています。

最初の写真は十字町教会の今昔です。百年以上の歴史のある教会ですが、現在は建替えられモダンな教会に様変わりしています。



2014年8月

十字町教会



1967年5月

左の写真は早川口歩道橋からの撮影です。



2014年8月

十字町商店街



1969年4月



2014年8月

大久寺山門付近



1969年4月

すぐにお気づきになると思いますが、四十五年前は山角町から十字町商店街にはアーケードがありました。今は全くその面影はありません。

次に少し西へ下りまして板橋の大久寺山門付近の今昔です。史



2014年8月

御幸の浜海水浴場



1967年8月

跡の案内標識柱が左右逆になっている点と公民館が新しく建替えられています。

最後に小田原海水浴場の今昔のご紹介です。同じ場所なのにこの違いに驚かされます。

斎藤緑雨の小田原療養生活と

金澤タケのこと

中條 利昭

斎藤緑雨は、慶応三年（一八六七）十二月三十日、伊勢国神戸で生まれ、明治十七年（一八八四）より、仮名垣魯文に師事した。主な作品には、『小説八宗』『油地獄』などがある。また、樋口一葉を森鷗外、幸田露伴らと共に評価した一人だった。内田魯庵の『思ひ出す人々』（大正十四年）で「緑雨以後真の江戸ッ子文学は絶えて了った」といつている。

ここでは、小田原町の出身だった金澤タケと緑雨のかかわり、小田原の療養生活の様子、小田原の当時の社会・自然、また緑雨を取り巻く小田原での友好関係などについて述べ、小田原の明治後期の姿を映し出したい。

緑雨と金澤タケとの出会い

明治三十三年（一九〇〇）十月二十二日、緑雨は、肺結核の療養で、藤沢鵠沼の旅館「東屋」に滞在した。そこで仲居のタケを知った。タケは小田原町の出身だった。関貢米『緑陰泉響』（明治三十三年）の『鵠沼海水浴』には、要約すると、当時の鵠沼は藤沢停車場

より十五、六町で、車賃（人力車代）は十五銭以上掛る、砂地だから荷物を携帯しない場合、歩行する方が便利である。江ノ島・片瀬より散策する場合は、片瀬川の河口の葦が繁茂する沼地を通って磯辺を伝い、地引網を見ながら、海浜の葦簀張の掛茶屋に至るとよい。旅館としては、鵠沼館、待潮館、東楼（東屋か）、三升楼などがある。皆四、五年前に新築したもののようにだと記されている。

『鵠沼名所図会』（明治三十一年神奈川県郷土資料集成 九輯）に東屋は、明治二十二年（一八八九）に建てられ、庭には白蓮・紅蓮を栽培し、広い運動場にはブランコも設けられたとある。旅館に「運動場」があったことが興味を引く。

緑雨の病状は、軽い肺結核であ

った。明治三十年（一八九七）頃から午後になると発熱を繰り返すことが多くなった。彼の場合は、重病になるというのではなく、軽い症状が長く続いたようだ。

この頃、湘南には、明治二十年（一八八七）に鎌倉海浜院（翌年には海浜院ホテルとなる）、二十五年（一八九二）に鎌倉養生院、三十年に杏雲堂平塚分院、三十二年（一八九九）年には茅ヶ崎に南湖院が次々に開設されている。しかし、これらは、立派なサナトリウム施設で、入院料が高価で一般庶民は入院できなかった。（第五回湘南地方サナトリウム旧跡訪問）鳥尾忠男等 複十字 No.337 二〇一一年一月号）。

緑雨は病気が軽度であり、金銭的な問題もあって、新鮮な空気・温暖な場所である鵠沼海岸の東屋に宿泊し転地療養したのであろう。

『鵠沼を語る会』の年表によると、明治三十三年（一九〇〇）十月二十三日、緑雨、東屋に滞在し日記を残す。明治三十四年一月十八日、与謝野鉄幹が訪問。また、徳富蘆花が『おもひ出の記』取材で鵠沼に滞在し、緑雨を訪問したとある。

緑雨と交友のあった馬場孤蝶は、明治三十三年の暮れになって緑雨が鵠沼へ転地して東屋にいたことを知った。十二月二十日の

便で転地療養したから遊びに来いという手紙が来たが、彼は東京に用事があった為に一度も東屋には行かなかった（『明治文壇の人々』昭和十七年）。

小田原転居の動機（きつかけ）

明治三十四年（一九〇一）四月十二日、緑雨とタケは、小田原町新玉三丁目の緑新道五〇七番地に転居した。転居の動機は、タケが誘ったからではなからうか。想像ではあるが、タケの実家があったのも理由の一つであったかもしれない。が、東屋での転地療養では今後も費用が掛るし、小田原は空気がよいので、そこで小さい家を借りて住んだ方が得だ、自分が親身に世話するからと言ったのではなからうか。この頃、緑雨は金銭的に困っていた。

中野敬次郎は、緑雨の小田原転居を、その頃、保養地・休養地として有名で、鵠沼よりよいところだと聞いたからとしている（『小田原近代百年史』）。

しかし、明治三十三年六月に赤痢が流行し、三十四年七月にも、患者が発生し、蔓延の兆があった。（『小田原市史 年表』）。このような情報は新聞で分かっていただろうから、転居にあたり心配はなかったのであらうか。

当時の小田原について、『古今雅俗東海鉄道名所記』（東輝文編明



『緑雨遺稿』（明治43年）に掲載された緑雨の肖像

治三十六年には、小田原・箱根・熱海に行くには、国府津駅で下車し、電気鉄道の便がある。小田原から熱海には人車鉄道がある。小田原町は、海水浴で知られた鷗盟館(箱根塔ノ沢環翠楼支店)、その隣には伊藤侯の別荘滄浪閣があると書かれている。さらに、報徳神社、大久保神社などにも簡単に触れている。この頃、小田原町は保養地・休養地としての存在性が高まってくる時期であった。

孤蝶によると、明治三十四年四月になって、小田原の緑新道へ引越して家を持ったという通知が来た。丁度その時、小田原に用事があつて行つた(孤蝶の姉の家が湯本村にあつたようだ)が、急ぎの用があつたので緑雨の家には寄らなかつたとある(『明治文壇の人々』)。

『小田原日記』から

『緑雨遺稿』(明治四十年)にある『小田原日記』は、明治三十五年、緑雨が小田原療養中の日記である。一部を抜粋すると、

一月一日 馬場氏(孤蝶)来る
 一月四日 大町氏(桂月)来る
 一月十五日 午後東京に行く
 佐々氏(醒雪)来る
 一月十六日 幸田氏(露伴)を訪ふ
 一月十七日 相撲を見る
 一月十八日 長く相逢はざりし

二個の女に逢ふ
 一月二十三日 箱根の諸山雪白し
 小峯に行く 花を着くる纓(わすか)に二分夕近くなりて風出づ、月圓かにして明かなりり(マコ)

一月二十四日 斜めに日をうけたる箱根山の銅の如く赤きはつねのことなり日すでに落ちて月未昇らずふと見ると山は黒く鉄の如し月稍々高くなれるとき窓を開ければ白銀の如しつもれる雪の猶解けざればなりこの日三たび變化す

一月二十五日 梅ヶ谷勝つ
 二月三日 小峯に行く、開くもの四分、處々紅梅を見る。

二月八日 晴 鶯来啼く 馬場氏来る

二月九日 好晴、暖かなり 馬場氏と共に小峯に行く

二月十日 感冒とおぼし心地すぐれず

二月十七日 終日横臥熱退かず
 二月十八日 気分ことにわるし

二月十七日 病すこしくおこたる
 二月二十四日 このごろ朝驚しきりに啼くあをきの実次第に色づく

三月三日 晴のち曇る小峯に行く梅は散りがた

三月十日 競馬あり

三月十二日 尾崎門吉といふ人来る

三月十六日 柳うつくし、そらまめ花着く

三月十八日 蛙鳴く

三月十九日 おもと来る

三月二十日 小峯(董、蒲公英、土筆みな老ひたり)より濱に出づ桃、彼岸桜、盛り也木瓜、連

翹蓮咲く
 三月二十七日 小峯より早川にいたる 源二郎来る

三月二十九日 海棠の花
 三月三十日 源二郎帰る

四月十日 大久保神社祭典

四月十一日 足柄連山雪あり風寒し 小峯に行く三日間競馬

四月十四日 報徳神社祭典

四月十七日 晴早川に行く

四月二十二日 袴を着く早川石橋を経て米神海岸に至る

四月二十四日 雨寒し、又もこの綿入

四月三十日 ふと熱出づ石塚醫師来る

五月一日 横臥

五月二日 心地わるし終日横臥

夜石塚医師来る夜半大風大雨

五月三日 近き田甫路を歩き廻る

五月四日 大稲荷祭礼

五月六日 小峯競馬(臨時)

五月九日 村井氏を訪ふ

五月十二日 箱根山頂に雪あり、寒中に異ならず

五月十七日 村井氏来る 石塚氏来る

五月十八日 牧石氏来る

五月二十日 午後東京に行く

五月二十七日 夕東京より帰る

五月二十八日 村井氏を訪ふ

六月三日 謙来る

六月五日 転宅

六月十日 寄留替届出

からだけでも、緑雨は、時々東京に行っていたことが分かる。

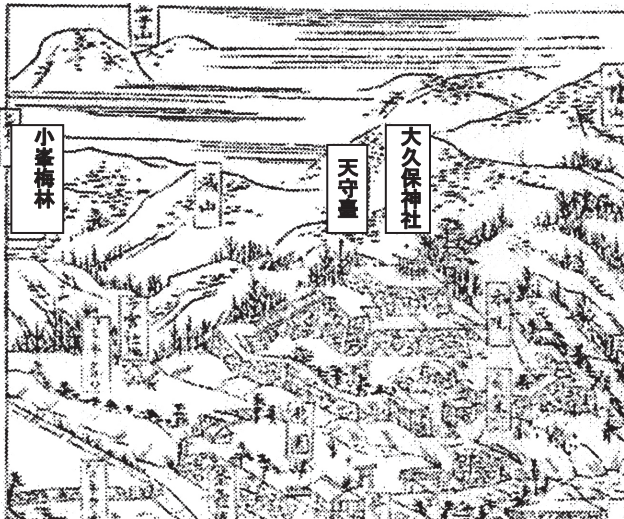
〈相撲〉 「相撲を見る」とあり、数日後に「梅ヶ谷勝つ」とある。

明治三十九年(一九〇六)七月九日付『横浜貿易新報』に板垣伯が、小田原に赴き、十字三丁目から松元(松本)剛吉方に入り、同道して、大砲・梅ヶ谷一行の相撲見学に行き、当日は小田原拍子・料理店など百数十名の総見物があったという。明治四十一年(一九〇八)二月十五日付では、小田原の花相撲一行が緑町一丁目相馬神社脇の広場で興行し、勧進元より板垣伯を招待するとある(『小田原市史史料編近代I』。小田原に相撲興行があつたようだ。

〈小峯散策と競馬〉 小峯には何回も散策している。そこは距離的にも適当な散策場所だったようだ。療養には適度な運動が効果的であることを教えられていたのであろう。

また、小峯で競馬が行われていた。それは、明治三十四年(一九〇一)十二月十五日に、小峯の町有地を競馬場として貸与したからだ(『明治小田原町誌 中巻』)。

〈緑雨の病状〉 この年は、四月でも綿入れの着物を着る程の寒さだったし、五月は、寒中のような気候だったようだ。緑雨は、たびたび熱を出すことがあり、その



『相模名勝絵図』

五年(一九〇二)の一月に旅行しようと思い、小田原へ行って、彼の姉の家に行き、一月一日の晩に緑雨の家を訪ね、いろいろ話をし、翌日伊豆の方に行った。その後、二月の初め、梅を見に行こうと思い、緑雨の所に行き、梅の面白いところ(小峯である)を案内してもらい、その晩東京に帰った。その時、緑雨は、早く東京に帰りたい、山や海では自分には仕樣ない、やはり東京の市中で塵を吸っていたい。なるだけ早く帰りたいと言っていた。そして、

時は、石塚医師に診てもらっている。石塚医師は近くの医院の人であろう。ちなみに、『小波身上嘸』(巖谷小波 大正三年)に明治四十五年(一九一四)稿の「転地原稿」がある。その中に、小田原の耳鼻咽喉科石塚医院が出てくる。その石塚国手は、鼻を諸病の根源と考え、鼻を治療することでどんな病氣も治せるといつていたようだ。村井弦齋の『食道楽』にもこのことが書かれている。石塚医師とは、石塚国手のことかもしれない。

類の中村という家の少女)でその子より大人しいと言っているから、姉妹か他の親類の子でもあろう。源二郎については、緑雨の姉が伊勢に嫁入りして、『デコサンの記』には「伊勢のニイサン」が出てくるから、その人かもしれない。謙は、緑雨の弟で、山田家に養子に入った。軍医であった。兄弟・親戚との交流もあったようだ。『デコサンの記』は、姪を小田原に連れてきてその様子を母親に手紙で知らせる形式の物語である。ここにも、明神(松原明神)の縁日、早川の観音、天神山や浜(新久か御幸の浜であろうか)へ行ったことなどが書かれている。

〈交友の記録〉 孤蝶は、翌三十

春ごろ、十字町に引越したと言う手紙が孤蝶に来たという(『明治文壇の人々』)。

日記に出てくる「村井氏」とは、『食道楽』の著者村井弦齋のことである。二個の女、尾崎門吉、牧石は不明である。

明治三十五年五月に、小杉天外が、小田原海岸(十字町三丁目)に転居している。天外は、緑雨に師事した人だ。『小田原日記』には出てこないが、交流はあったと思われる。

〈小田原海嘯〉 この日記の春以降は、十字町のことになる。仲が良かった幸徳秋水への手紙によると、西海子(十字町三丁目七二七番地)に家を借りたようだ。その家は、東京式で座して海山が見晴らせるような場所であった(『小田原近代百年史』)。

孤蝶は、夏の小田原海嘯の時、心配して緑雨に見舞状を出したが、別段危険が無かったという返事がきたという。それから、その秋、緑雨は、東京に帰ったとある(『明治文壇の人々』)。

実際は、緑雨の借家の近辺まで海水が来た。西海子に住んでいた住民は、ほとんどそこから一時引き上げたと言う(『小田原近代百年史』)。

〈転宅の疑問〉 「六月五日転宅」は、どのようなことか不明である。三月に十字町に転居しているし、

東京に戻ったのは、秋を過ぎてからだから時期がずれる。

緑雨の小田原自慢

『徒步旅行』(中村楽天 明治三十五年)には、「十二月八日 相州小田原 斎藤緑雨方にて」という記事(明治三十四年)がある。楽天は、箱根宮ノ下を立って小田原へ下り、ある通行人に緑新道を尋ねると、郡役所の横丁を教えてくれた。教えられた通り行ってマゴマゴしているとき後からその人が近づいてきて家を教えてくれた。今日中に平塚まで行けないので、泊まることになった。その時、緑雨は「小田原の鰯を食って見たまえ」「小田原の菓子食って見たまえ」「時化だから小田原の鰻を御馳走しよう」などと、小田原の、小田原のと何度も何度も繰り返したと言う。彼なりの小田原自慢をしたようだ。何とも、ほほえましい情景だ。『小田原近代百年史』にも、これに関連した楽天の「緑雨と独歩」を引用している。

妾にあらす婢にあらす

『禿木遺響 文学界前後』に、タケのことではないかと思われる人物のことが出ている。それによると、小田原十字町で静養していた緑雨は、鵠沼の旅館で懇意になった、ちよつと渋皮のむけた女が、身の回りの世話をしていた。一体

細君なのだろうか、なんだろうということが仲間内で噂になった。すると、緑雨は空嘯いて「妾にあらず、婢にあらず、曰く女なり」と。

タケが、小田原で緑雨とどのように過ごしたか明確ではない。緑雨を訪問した仲間の資料にもタケのことに触れた箇所はない。緑雨の記録から想像するしか方法がない。多分、タケは、訪問客が来ても、誰にも紹介されないで、そつと部屋の間で針仕事をしていたか、下女の如く台所で健気に料理を作っていたのかもしれない。寒い夜、緑雨が高熱を出した時は、医者に裾を乱して走ったり寝ずに傍で看病したりした。時々、緑雨の後について近郊をゆったりと散策したかもしれない。たまには実家に帰ることもあったのだろうか。「デコサンの記」に出てくる緑雨の幼い姪を連れて駄菓子屋に行ったかもしれない。それなりに幸せな日々を過ごしたと思う。しかし、これらは一切想像に過ぎない。

幸徳秋水との手紙でのやりとり

幸徳秋水の妻であった師岡千代子の『夫・幸徳秋水の思い出』(昭和二十一年)から、秋水と緑雨の関係を見ると、緑雨は、明治三十一年以来、他人が想像する以上に秋水の親しい友の一人だった。

秋水の母親も緑雨を好んでいて、彼が来るのを楽しみにしていたと書いている。

緑雨は、小田原からほとんど毎日、秋水に手紙を出した。そこに「四面蕎麦の引越し沙汰」「町の名の十字にてもよろしく」などと書いて、十円の工面をしてきた。また、「昨夜は熱も四十度を上下いたし候」と手紙にあり、身体具合も悪かったようだと言っている。秋水が小田原まで見舞に行ったのは、ある時の手紙に、一枚の紙に真ん中に大きな円を描きそれを二等分して一方を黒く塗って、その円の下に半死半生の体に御座候とだけ書いてあったからである。十字町に移転した時のことであろう。

小田原の自然を愛でた緑雨

小田原は緑雨にとって、いつでも居たい所ではなかったようだ。皆に、早く東京に帰りたい、山や海では自分には仕様ないと言っていたからだ。だが、『小田原日記』には、「斜めに日をうけたる箱根山の銅の如く赤きはつねのことなり・・・」「柳うつくし」など小田原近辺の自然の様子に感動している箇所が多い。大久保神社祭典、報徳神社祭典なども簡単に記されていて、見物に行っただかどうか分からないが、そのことを記載したことからすると、少

なからず関心を持ったようだ。「小峯より早川にいたる」「近き田甫路を歩き廻る」「早川石橋を経て米神海岸に至る」などの散策は、療養目的であったようだが、道の途中で立ち止まって、付近の風景を飽かず眺めたであろう。鳥の鳴声に耳を傾けたであろう。田甫路に座り込んで野草にそつと手を触れたであろう。『デコサンの記』にも明神の縁日、早川観音、天神山や浜へ行ったことなどが書かれている。東京の方が自分には合っているといっても、小田原療養生活が続くに従って、小田原の自然に親しみを感じてきたのではなからうか。

秋水の妻が、緑雨は、本当は自然を愛し心の温かい人であったといっていることも裏付けとなる(『夫・幸徳秋水の思い出』)。

また、戸川秋骨も、緑雨は都会趣味であったが、自然を好んだと断言できる、書き物から証拠を得ることは難しいが、一緒に行楽した経験からそう言えると力説している(『凡人崇拜』大正十五年)。

小田原を去ってからの二人

緑雨はタケとともに、再び東京に帰った。孤蝶は、明治三十五年十二月二十三日付で、浅草の須賀町に家を借りたという通知を貰った。

そして、小田原を立ち去ってか

ら、一年あまりたった明治三十七年(一九〇四)四月十三日に本所横網町で、緑雨は亡くなった。孤蝶によると、緑雨の臨終まで世話をしていたのは、緑雨の従兄の若江と言う人の妻とタケの二人だけであった。葬式の時、彼の年齢ならば細君があるとか、子があるとかして、それが喪主の席に並ぶことが当たり前であるが、そういうものもなく、身近な人は、一人の妹と若江という従兄の人が会葬しただけであったから何となく涙がこぼれて仕方なかったとある。タケは、内縁で終わったとしても、緑雨の臨終を看取ったことで幸せであったと思いたい。

数年前の『伊勢新聞』(平成二十年九月十七日付)に、タケは緑雨の死後、日蓮宗の寺で有髪の尼になって、六十四歳で亡くなったとあり、『朝日新聞』(平成二十年九月十八日付)には、緑雨の死後、尼僧になり、その後、東京の中野区の親類に身を寄せたとある。

(平成二十六年八月)



金澤タケ(「中日新聞」平成20年10月3日付)

小田原藩 兄弟 浅田 の敵討

『孝貞義鑑』散策 (21) (最終回)

鈴木 好こう

五、浅田の親類縁者

只助の妻キクはお城坊主平井頼助の二女である。頼助の妻は兄弟が五、六人いるし、頼助は男六人、女四人ほどの子福者である。さらに、頼助の娘と結婚した浅田只助は、門次郎をはじめ六人の子供を持っていたから、只助の養子鉄藏は、数多くの親類縁者を持ったことになる。

平井頼助 坊主頭(かしら)天保二年(一八三二)剃髪して宗優と改名。天保十年坊主頭をやめ頼助と改名。天保十三年七十歳になり泊番ご免となる。

平井家は長男芳之助が継ぐ。

二男森右衛門 内田家に養子にはいり駒次郎が生まれる。

三男小八 河野家に入り喜太郎が生まれる。

長女 島田大介と結婚し歌松を生む。

四男九十九 西郷家に入って、今の小田原駅前「マルイビル」あたりに住んでいた。五十石。子供に鎌吉、勝之助、藤太がいる。藤太は三十石で、大乘寺の南五、六十メートルあたりに住んでいた。

五男藤藏 小田原駅ホーム西寄り、西郷家の二軒先のところ

すみ、八百吉、万之助が生まれる。

二女キク 浅田只助と結婚して、門次郎をはじめ男三人、女三人を生んだ。

三女 須藤保之助と結婚して貞太郎を生んだ。

四女 山本文兵衛と結婚した。

門次郎の義弟小林友衛の妻は内芝丹治の妹である。内芝は二百二十石取りで今の小林病院付近に居住した。大之助が後を継ぎ、二男藤八郎は片山家に、三男於鬼允は伴家に、四男八五郎は湯川家に、五男錠五郎は片山家に養子に行った。

門次郎の弟定吉は、文久二年(一八六二)の『先祖書』には、「先年出奔仕 当時秋田山城守御領分奥州田村郡三春二罷在候 元御料理人頭支配」とある。天保十三年(一八四二)の『先祖書』には「先年欠落仕 当時住所相知不申 元御料理人支配」とあるから、定吉が出奔したのは中沢家の養子になってから、ということ以外は不明である。なお、当時とは現

在の意。

下の弟儀兵衛は石川家の養子になった。

門次郎の姉は鉄藏と結婚し、妹の一人は千賀雪斎と結婚し、あとの一人は関小左衛門と結婚した。代々足輕の家系の娘が、いくら義兄が五十石の藩士に成ったからといって、そうそう二百石、百五十石の家柄の嫁になれるものではない。これはやはり鉄藏の人物が買われたものだろう。「雪斎」は隠居後の名前で、初め八右衛門といい、文政三年時は勘定所用人で、浅田兄弟に敵討についての諸心得を申し渡している。のち喜内と改名し、二百石取御役人並席にいた。

雪斎の長男衛守は、雪斎の弟金子官兵衛の娘と結婚して弁之助をもうけたが、衛守は若くして死んだので、二男迪之丞を嫡子とした。

関小左衛門美章 百五十石。安斎小路に屋敷を構え、大目付役。関重磨、士次、鋭三の父で、重磨は関重広博士の祖父である。小田原の戊辰戦争の立役者の一人である。

☆ 小田原の戊辰戦争

慶応四年は戊辰の年である。九月八日が明治元年になった。そしてこの年は鳥羽伏見の戦いで明

けた。三月、江戸城が開城して、時世の赴くところ小田原藩も官軍に恭順を誓った。

林昌之助を総統とする幕府遊撃隊が、三島から箱根に向かっていくとの報に、藩は三百人の藩兵を出動させた。しかるに、彰義隊が旗揚げし将軍も海路小田原に来るとの情報が入ると、もともと佐幕派の勢力の強かった藩の与論は佐幕に反転して、佐幕派の関小左衛門を箱根に派遣し、遊撃隊と休戦し協力するという藩命を伝えた。かくして遊撃隊員と小田原藩兵は、箱根にきた官軍の軍監中井範五郎を刺殺した。激怒した官軍は小田原藩に遊撃隊掃蕩の命を下した。

当時江戸藩邸にいた中垣斎宮(六十四歳)は、急遽帰原し、時勢を説き勤皇を説いて小田原藩は再び勤皇となり、謝罪のため、官軍の監視のもと箱根山崎で遊撃隊と激戦した。かなりの被害者を出した末、戦は四日で終った。

六月始め、小左衛門は罪を問われ二度の糾問を受け、六月上旬に藩の重役三人共々網掛け籠に乗せられて江戸に送られ、芝の上屋敷に置かれた。死罪になる可能性があった。

六月末に家老岩瀬大之進が切腹し、小田原藩は領地を減ぜられるなどの処罰を受けた。取調べの結果、小田原藩が佐幕に寝返った

のは遊撃隊からの偽りの情報を信じたからと判明し、小左衛門は吉野大炊介と共に明治三年二月に解放された。明治十五年一月五日死去、七十四歳。妻春子(ハル)は明治二十八年四月二十二日死去、七十八歳。

春子について重磨は次のように記述している。(『小田原近代百年史』)

「慈母君浅田氏 名は春子。淑徳を修め父母に孝あり。克く勤儉にして、経済術に長じ、遺債数百両ありしも期を約して弁償せり。」
「父母に孝あり」は父母に孝なり、の間違いであろう。

嫡子重磨は天保七年(一八三六)生。莊之介義近を名乗り、安政五年時「中之番」。文久三年、小田原藩の京都御所の親衛隊員十人の一人に選ばれ、隊長有浦元右衛門に率いられて京都に向かい、六月十六日に京都に着いた。しかし四ヶ月程して隊は解散を命じられ、十月十日小田原に帰着。翌元治元年、今度は藩主に率いられた千五十八人とともに京都に向かった。この時廿三才くらいの重磨は近習役として藩主に陪従した。蛤御門の戦に参加し慶応元年二月六日帰原。明治元年の戊辰戦争で佐幕派の形勢不利と悟り、身の危険を察して六月十日藩を脱走して幕府海軍に身を投じ、榎本

武揚とともに咸臨丸に乗船した。しかし結局艦を降りて小田原藩に自首したが、藩主の温情によりひそかに江戸に出立した。

明治四年の版籍返還と廃藩置県の際、茨城県北相馬郡長となっていた重磨は、明治十五年小田原に招かれ第二代の足柄下郡長となり、小田原町十字町三ノ六七九に居住し、郡長として明治十九年まで勤務した。妻は藩士井沢家の女光子(てるこ)。明治三十七年七月十三日に死去、六十九歳。彼の明治維新期の活躍ぶりは『明治小田原町誌』の「関氏六十夢路」に生々しく記録されている。

長子重忠は文久三年十月生。海軍兵学校に入学。機関生の大試験で首席となり長剣一口を賜う。英国に留学、英国海軍大学卒業までの七年間にテニスと写真術を覚えた。明治二十二年に帰国。二十三年、軍艦高尾に乗り組みヨーロッパを巡航。二十四年、海軍兵学校機関術教官となる。この年福島県知事従三位勲二等男爵渡辺清の女文子と結婚したが、文子は二十六年に二十二歳で死去。のち喜美子と結婚。喜美子は重忠の死去に後れること八ヶ月の昭和二十年十一月二十五日に八十一歳で死去。

日清戦争に従軍。戦後、戦利品となった清国の最大の軍艦「鎮

遠」の鐘をもらい受け、当時の小田原中学に寄贈した。鐘は現在も小田原高校にある。日露戦争では、奇しくも広瀬武夫と共に軍艦「朝日」に乗組んで日本海会戦に参加したが、広瀬は旅順港閉塞隊長として戦死した。重忠は海軍機関大佐で、従五位勲三等功四級。のち少将。昭和二十年三月十二日死去。

二男重孝は明治三年一月生。日露戦争に参加。海軍機関中佐。正六位勲三等功四級。のち少将。

三男重光は明治八年十月生。日露戦争に参加。海軍機関大尉。正七位勲五等。のち少将。兄弟三人が海軍少将というのも珍しい。

重磨、重忠については『小田原近代百年史』が詳しい。

重広は重忠の子。工学博士。昭和四十七年の小田原女子短大事件では教職員組合執行委員長、のち学長。市教育委員長、小田原ペシクラブ初代会長。日本電子工学院院长その他数多くの肩書を持っていた。昭和五十七年二月十三日死去、八十九歳。重広の専門は照明学。法名は照明院重広日徳居士。

終わりに

万助の評価は「万助の墓」に既述したように、小田原側と水戸側とでは大きな隔りがある。小田原側では万助は紛う方なき大罪人で、いささかの同情の余地も残さ

ないが、水戸では全く異なる。郷土史家山形雄三著「祝町昔がたり」によると、万助は湊村では水戸町(本町二)磯前(いそさき)専右衛門の借家にいたという。祝町に来てからは、すすんで願入寺境内の掃除をしたり、土地の若者を教導したり、祝町遊郭の遊女に頼まれて代筆をしたりする、信心深く品行方正な模範的会社人である。それが浅田兄弟に襲われた時、刀が手元になかったばかりに無惨な殺され方をした、と。

万助の遺体は願入寺の南園に葬られた。墓を建てたのは那珂湊と祝町の商人たちである。墓の建立が天保二年ということは、殺された文政七年から七年後で、この事件はまだ生々しく土地の人たちに記憶され噂されていたはずである。もし万助が嫌われ者であったり鼻つまみ者であったりしたら、いくら同情したからといって墓まで建てたりしなかっただろう。ご当地では万助はあくまで「気の毒な万助さん」である。どうも万助の実像は水戸の方が近いと思われる。

墓に詣でる人の数が増え、賽銭も増え、線香の煙が絶えなくなると、それに伴って様々な問題も生まれてきた。それは線香の火の始末や、賽銭泥棒対策である。寺は墓を本堂に近い山門に移すことで、参詣もしやすく管理の目が行

き届くようにした。

万助への同情が刀の奉納で示されているうちに、次第に刀の効能への信仰が芽生えてきた。刀は子供の虫気を切る、悩み事も切る。さらに「太刀」は悪縁や悪疾をも「断ち」切ってくれるであろうと、善男善女の願望は飛躍する。そこで現世御利益を期待して玩具の刀を奉納する。今ではプラスチック製の色とりどりの刀が何十本も山積みされている。中には真剣を奉納した者もいたという。

刀のほかには女の髪の毛も奉納されたのはなぜだろう。今では紐に通された折り鶴も奉納されて

いる。さらには進学祈願も多いという。これはどうやら、「万助」は「よろず助ける」と読めるからからでしようと思入寺の住職は云われる。

平成九年九月二十二日の台風十七号のために、それまであったささやかな万助堂が崩壊し、今は「万助さん仮お堂」によって墓は雨から守られている。「さん」付で呼ばれるほどに万助は土地の人に親しまれている。

浅田兄弟は仇討ち物語のなかに生き、成滝万助は万助堂に生きている。

散策編 おわり

『孝貞義鑑』散策』と私

鈴木 好

『小田原史談』に三年八ヶ月に亘って連載された『孝貞義鑑』散策』が終わりました。著者の思い出話を一席。

【『孝貞義鑑』散策』の原本は『孝貞義鑑』の原文とその翻字文と散策部分と資料編で成り立っている。『小田原史談』に連載されたのは散策部分だけです。

【『孝貞義鑑』散策』を書くに至

ったきっかけは「あとがき」に書いてあるように、極めて偶然に、気楽に書き始めたものです。それを写します。

私宅から、六、七軒隣の高田マサさんの家は、敵討で有名な浅田兄弟の兄鉄蔵の実家である。四、五年ほど前、マサさんふとそのことを訊ねたら、『孝貞義鑑』を貸してくれた。ところが、くずし字でかかれていてサツ

パリ読めない。そして、附いているフリガナがどうも頼りない。同じ字なのに違ったフリガナだったり、送りがなの語法も少しおかしい。そこで自分なりにくずし字を勉強して、なんとか全部誰にでも読める字に書き換えてみた。

あちこちわからない字句を調べているうちに、よく見掛けるけれど改まって考えたと説明の出来ない語句の多いことに気がついた。いや語句だけではない、敵討のあった江戸末期の時代背景も、当時の小田原の状況も皆目知らない。これではどうにも話にならないと思い、『孝貞義鑑』をテキストにして、手元の資料で思いつくまま気の向くままに調べては書き、書いては調べているうちに、いつかすつかりハマって、こんな本になってしまった。

別に「研究」などと大上段に構えたものではない。従って、一々引用書を明示したり、ウラをとって実証したりはしなかった。いわば鈍行列車に乗って、気紛れにあちこち途中下車して探訪を楽しんだようなもの。たまたま乗り合わせた列車が『孝貞義鑑』であったということになる。しかし楽しみにはキリがないのでこの辺で打ち切りにした。古文書については全くの門外漢。その上、誰にも辞を低くし

て教えを請う事もしなかったから、今のところどうしても読めない字もあるし、間違った読みも解釈もして当たり前と腹をくくっている。読み返すたびに間違いが見つかる。さりとて間違いないと又キリがないから、この辺でうち切ることにした。まあ自分なりに最大限の努力をしたから、間違っているも「以て瞑すべし」と覚悟は出来ている。というわけでこの本は、良かれ悪しかれ百パーセント鈴木好の作品である。

◇古文書のコピー

貸して貰った古文書にはいっぱいふりがなが書き込んであって目障りなので、これを消すことから始めました。今ならスキヤンしてデジタル写真加工ソフトを使えば大した困難もなく抹消できますが、今から十五年前にはコンピュータがまだ普及していなかったもので、ひとつひとつ白い修整液を塗って消しました。ホネでした。修整が終わるとそれをコピーして原本としました。

◇参考資料

参考資料の文献については、『小田原史談』第二十七号の19ページに書いてありますが、文中『先祖書』として度々引用されている『御家中先祖並親類書』(小田

原市立図書館発行)が脱落してしま
す。

私が『孝貞義鑑』散策』を書
いたのは十数年前のことです
から、以下の文はすべてそのつもり
で読んで下さい。

参考にした古文書十八部は、
『孝貞義鑑』を別にすると、二部
を除いてすべて小田原の城内に
ある図書館所蔵です。すべて和綴
じで、禁帯出です。日曜日の午後
何度か図書館にこもって判読し
ました。

どの本も共通して公文書の写
しや鉄蔵の口上書を書いていま
すが、事件の発端の記事では『常
陸の仇討完』がイチオシです。
詳細で具体的で、一番事実らしい
です。

万助の人相書きを載せている
のは『小田原藩士仇討細書』だけ
です。

ずば抜けているのは『小田原仇
討二関スル始末公文書写』です。
これは本懐を遂げた兄弟が水戸
を発つて江戸表に来るまでに貰
った銭別の詳細な記録です。どこ
の誰からいくらくらとびつし
り小さな文字で書き込まれてい
て、圧倒されます。恐らく第一級
の史料でしょう。

『敵討』は、有名な敵討のなか
でどれが事実でどれが創作かに
ついて書いています。著者の平出
鏗二郎(ひらでこうじろう)は明治

二年に生まれ、帝国大学選科に入
学、文部省の編纂官になり、「日
本風俗史」など書いたひとです。
解説書の中では、「磯浜祝町の
仇討ち」、新人物往来社『歴史読
本』が一番信頼できます。

◇『浅田兄弟の敵討・考』を書く
『孝貞義鑑』散策を出してから
一年ほどして、人に勧められて
『浅田兄弟の敵討・考』を月刊の
「かながわ風土記」に連載するこ
とになりました。

ここでは散策しないでまっし
ぐらに仇討ちの本道を進んでい
ます。とはいってもの時折は一寸
寄り道して一服しています。平成
十一年十一月から十三年三月ま
での十七回でした。関連した写真
も載せました。私にとっては決定
版です。

◇ 雑感

この敵討ちにはわからないこ
とがいっぱいあります。分かって
いるのは本懐を遂げたあとの鉄
蔵の口上書ぐらいで、これもある
期間に限られています。それ以外
の口上書きは最初から無かった
のか、それとも何か工合の悪いと
ころがあって故意に消滅された
のか。

口上書は公文書だから、そうや
すやすと処理は出来ないはずで
す。故意ではなくて火事や地震な

どの天災や事故で消滅したので
しょうか。

事件の発端からしてわからない
い。『孝貞義鑑』では発端の部分
だけ欠けているのは故意か偶然
か。

そして万助については小田原
にはなんの資料もありません。強
いて云えば人相書きで、彼が中肉
中背で、色が白く、丸顔で発声が
明瞭でないこと、目尻が上がり気
味で、髪が薄いこと、年齢は二十
九歳だということくらいです。

◇なぜ、どうやって脱獄に成功
したか

なぜ脱獄したのでしょうか。死
罪になると思ったからとすれば、
なぜそう思ったのか。

どうやって脱獄したのか。二月
の夜中では寒かったろうに衣類
はどうなっていたか。明るくなっ
てひとに見られても疑われない
服装だったのか。当座の飲み食
いはどう工面したのか。どう考え
ても、単独の犯行とは思えません。
あらかじめちゃんと手はずが整
っていたのでしょうか。人物か。
しその協力者はどういう人物か。
獄屋で親しくなつて充分打ち合
わせが済んでいたのか。そのか
いた男が先に所出して待ち構え
ていたのか。それは一人か複数か。
万助にそんな人望があったとは思
えないのだが……。とにかく

くわからないことだらけです。

◇ 鉄蔵に対する感情

鉄蔵は一兵卒から将校になる
という破格の出世をした。それが
彼の努力の賜物であることは誰
も認めるところでしよう。足輕仲
間の連中も、彼が常州で本懐を遂
げたと聞いたときは、心の底から
拍手して祝福したことでしょう。
しかし江戸から小田原に帰って
もう足輕ではなくなった鉄蔵に
出会ったとき、同輩だった足輕た
ちは素直な気持ちでいられたで
しょうか。もう「おい鉄蔵」と呼
びかける事は出来ない。身分が違
う。そして月日の経つうちに羨望
と嫉妬の気持ちが生まれてもお
かしくはありません。

広間席の侍達にしてみると、今
まで下男のように思い扱ってき
た足輕が同輩になった。

平静な気持ちでいられる筈は
ありません。広間に新参の鉄蔵に
進んで声を掛け、仇討ちの苦心談
を聞こうとした素直な侍が何人
いたのでしょうか。この成り上が
りが、と腹の中では軽蔑していた
のではないのでしょうか。

藩の上層部にしても、鉄蔵の処
遇については様々な意見や思惑
や嫌悪、賞賛が入り交じっていた
に違いありません。前代未聞の出
世をした鉄蔵をどう処遇するか。
順席が一つ上がるのに十八年か

かったのは異常といえないでしょう。そして一旦上がったあとは毎年のように上がったのはなぜなのでしょう。

◇ 人間関係に恵まれた兄弟

浅田兄弟の敵討ちが達成できたのは幸運としかいえません。世人一般が兄弟に味方して万助に関する情報を提供してくれた。その情報はしばしば間違いであり誤報であつたにしても、兄弟に同情し味方してくれた証拠です。

兄弟にはよい親類縁者が大勢いました。江戸で駕籠屋をしている義兄にはどれだけ世話になっ

たことか。剣術の指導をしてくれた人たちもいた。しかしなんと言つても顕著な功労者として富士御師中村伊織と水戸街道中宿の料理茶屋の宮川太吉の二人を挙げたいと思います。中村は商売柄関東各地を歩き回り、江戸にも明るい。情報を得る機会も多いし伝達するにも有利でした。万助が常州にいることを知らせたのは只助の料理仲間でした。その知らせを江戸の鉄蔵に知らせたのは中村でした。しかしなんと言つても最も重要な役割を果たしたのは太吉です。彼がいなかったら兄弟が討ち取ったのは万助だとい

確認が出来なかったはず。打ち手の身元の確認と仇人の確認、この二つが揃わなければ、この殺人事件は正式の仇討ちになりません。打ち手と仇人が役所によって確認されて帳簿に記入されたのを写したのが御帳写です。藩から幕府に届け出がされて幕府はこれは確かに仇討ちであると公認し、いろいろな注意や手続きを指示します。従つて御帳写は仇討ちの公認証であつても免許状とは言えないと思います。

田原に通報し、事件後は参考人として進んで「これは成滝万助に相違ありません」と証言をしてくださいました。太吉がもともと善意のひとであつたとしても、彼がこれほどまでに面倒をみてくれたのも、只助一家と親しかったからでしょう。ここにも只助の人柄と浅田家の日頃の世間付き合ひが垣間見られると思います。日頃の付き合ひの勝利と言えそうです。

おわりに、拙文を連載してくださつた小田原史談会と、読んで下さつた会員の方々に厚く御礼申し上げます。(平成二十六年十月)

小竹久成寺と三十番神堂

米光 道子

八月の下旬、今年の暑さも一息ついた頃のことです。私は国府津の北東、小竹地区の久成寺(くじょうじ 24頁地図参照)を訪問いたしました。お檀家の方から久成寺には三十番神堂がありますよとお聞きしたものですから、それではと、予め訪問の趣旨をお伝えして、たっぷりお話を伺つてまいりました。これはその極めて簡略な報告です。

久成寺縁起

はじめに、開山の日要(にちよう)上人が自ら筆を執つたという久成寺の縁起「常英山久成寺開闢以来由緒古起」を拝見させていだきました。これは『新編相模国風土記稿』には載つてない内容です。ので、ご理解を得てここにその一部を掲載いたします。

昔シ此地所ヨリ土中出現石地藏尊工大願ヲ祈誓、一心清浄ニ御題目ヲ唱へ、就ニ老翁盲人成就ス、故ニ土中出現地藏尊ヲ安

置シ、永正二年度(一五〇五)草小庵ヲ久成庵ト名(ヅ)ケ永正二年ヨリ天正五年(一五五七)マデ八十九(ママ)年間備地ニテ、相陽愛甲郡依知本間之旧館星梅トモ梅香ト云妙傳寺十七世祖東林院日要上人、本山十二祖僧正日珖之命ニ依テ、常英山久成寺開祖トス、以テ永々下総國正中山法華經寺直末ト為ス有り所以也

天正六年(一五七八)戊寅年四月

東林院日要 筆誌之
開祖東林院日要聖人は佛心院日珖聖人の徒弟也

文禄四年(一五九九)二月二十三日珖師自筆本尊日要聖人ニ授與セラレ保存之有り

開山日要上人の師僧日珖上人は大坂の堺に生まれて比叡山に学んだ学識高い僧で、堺に妙国寺を開いた人。その流れは「堺法類(さかいほうるい)」といわれ、今でも年に一度妙国寺に集つてゐることです。

小田原近辺では千代蓮華寺、東町弘経寺、本町妙泉寺、扇町正蓮寺、上町廣宣寺、小竹受教寺、城山蓮船寺、板橋御塔生福寺、南足柄市雨坪弘行寺、開成町吉田鳥教会が同じお仲間と聞きました。

現在の久成寺ご住職の師僧のお寺とこの久成寺は同じく境法類なので、ご住職はその法縁でここにいられたそうです。

お若い村上副住職さんが御本尊の説明をしてくださいました。久成寺の御本尊は「一塔両尊」といわれ、須弥壇中央に「南無妙法蓮華經」の御本尊たる一塔、左右に釈迦如来と多宝如来の両尊が祀られております。

お曼荼羅には多くの神様仏様が書かれていますのでその理由をお聞きしますと、魂として敬われている神様仏様を区別なくお祀りしているのですというお答えでした。

副住職さんのお話は、お曼荼羅の意義から「一体の仏様の間から『南無久遠実成釈迦牟尼仏』が現われて御本尊様が概念そのものになられた」ということに及び、さらに考え方を変えることによって世界の見え方を変えられる、それによって人間が救われ幸せになることができるという「幸せになれる理論」を伺いました。

三十番神堂

三十番神堂は本堂に向かって左にあります。年に一度の大祭は三月十五日で、二十人ほどの善男善女が集って催されるのだそうです。

三十番神って何ですかとお尋

ねしましたら、ご住職のお知り合いの今井玄誠上人が書かれたものに「三十番神略縁起」があつて、その大意を解説していただきました。しかし、私にはこれを理解してお伝えする力はありません。大まかに三十番神の意義を次のようになぞってみるだけでして、貴重なお話なのに理解不足を申し訳なく思います。

三十番神というのは三十日を三十の神でお守りするという意味ではない。三十は日蓮宗の「三諦(たい)十界」という言葉に由来する。「三諦」とは空仮中の三諦で、どうしたら拘らないでいいか、考え方を変えるにはどうしたらいいかを明らかにする三つの真理を意味し「十界」は十段階ある心の境



三十番神堂内(久成寺)

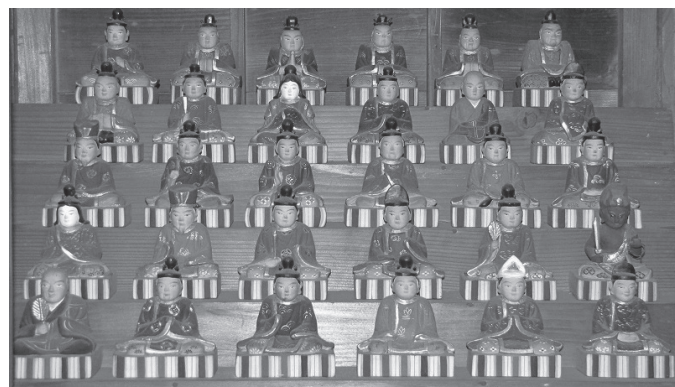
地のことを意味する。「番」とはこの三諦十界を司ること、ただ番をするとか順番という意味ではない。「神」とは一心の本分、万法の自性であつて、普通の神様のことではない。

三十という数に意味があるのではなくて、日本中の神様を洩れないように入れているのだそうです。

最後に、毎日の三十番神堂のお勤めはどういうものかとお尋ねしました。副住職さんは「仮に毎日、熱田大明神・・・天照大神・・・八幡大菩薩・・・とお祈りしていたら大変時間がかかってしまいます。そこで、一日一神ずつお経をあげさせていただいたら三十日で全ての神様にお経をあげられます」と言われ、久成寺では毎日お茶とお水をお供えして「御番の善神」(その日の神様)にお経をあげているのだそうです。

お堂の石段に半ば埋もれた石柱がありました。「願主 野原」 「安政四」と刻まれており、これはこのお堂の再建の時期を示すもののようによいます。

(小田原市中村原在住)



厨子内に祀られている三十番神

新会員紹介

名前(敬称略)

住所

松本 利夫 小田原市根府川
宮原 諄二 小田原市府川

会員の方へお願い

―新規会員募集―

小田原史談会では常時新規会員を募集しております。郷土の歴史に興味をお持ちの方には是非会員になつていただくよう、お誘い下さい。申し込みは史談会役員または左記へ連絡願います。会費は年額三千元です。

小田原市堀之内三一・一五
電話 ○四六五三七七八

植田士郎

上町の大塔家について

脇松雄

上町と大塔家

小田原市上町(かのまち)には屋号が「隠居」の大塔(だいとう)家・「本家」の大塔家、更に三軒の「分家」、計五家が現在大塔姓を名乗っている。

このうち「隠居」の大塔家は左図に示したように箱根路(酒匂道)沿いにあり「中村湖」を北に迂回する道(図の破線部)と船で向こう岸の船取場に渡るルート(図の一点鎖線部)の分岐点にあり、昔は宿屋を営んでいたという。

また前号(二三八号)で榎本保美さんは大塔家に関する伝説について次のように述べている。

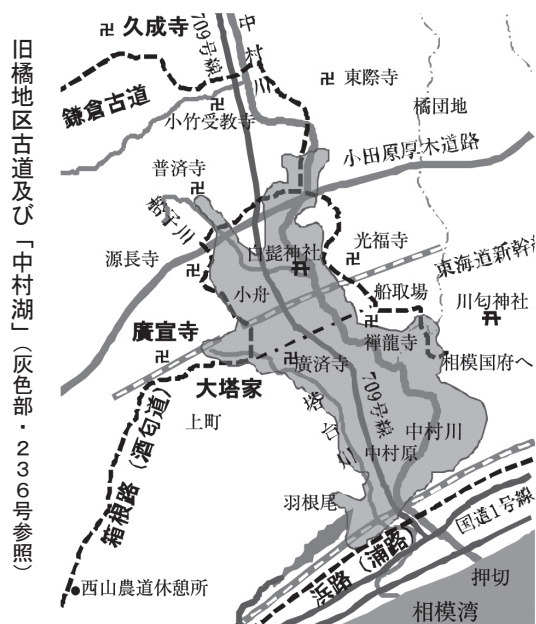
建武二年(一三三五)の中先代の乱で殺された護良親王の御胤を宿した「南の方」が京へ上る途次上町で男子を出産し、その子が大塔を名乗り、その後裔が今日の大塔家であると言う伝説がある。

護良親王は大塔宮とも呼ばれている。大塔家付近には「酒匂道」「南久保」等の小字名があり、更に伝承ではあるが「南の庭」という地名があったとも伝わり、この伝説があることも肯ける。

大塔家と廣宣寺

大塔家は代々勝右衛門を名乗り、村の長を務め村の中心的な役割を果たしてきた。

日蓮宗廣宣寺は大塔家と深い係わりがある。創立は至徳元年(二三八四)、開基は大塔家と伝えられる。創建時の場所を上町「南久保」であるが、いつの頃から、山津波で堂塔伽藍等悉く埋没したと伝わる。今は丈なす草むらの中に五輪塔、宝篋印塔等



旧橋地区古道及び「中村湖」(灰色部・236号参照)

二十数基散在し、「墓の久保」と称している。ちなみに「南久保」の山手に「大崩」の小字名がある。

その後、大塔家は自家が所有する広大な土地に廣宣寺を再建したという。再建した当時、境内は方一町あり大小の堂塔が建立されていたと伝えられている。

その後関東大震災の被害、再建、農地改革による解放を経て現在に至っている。

尚本堂の内陣には大塔家との関わりを示す十六弁の菊の紋章彫刻が正面に配されている。

大塔稲荷

「本家」の庭に大塔稲荷がある。当地方個人の屋敷神としてはかなり大きな社である。

大塔稲荷という名称の珍しさにひかれ、長老にその名の由来や歴史を尋ねたが、火災や山崩れにより、古文書その他大部分は失われてしまったという。

大塔家に「髭曼荼羅」が伝えられている。「髭曼荼羅」に記されている最初の年月日は延宝三年(一六七五)九月廿六日である。おそらくこれ以前に山崩れが発生し、系図等を失い、再度作成され、大塔稲荷も現在地に再建されたのではなかろうか。

ロマン溢れる散歩道

私は、上町と隣り合わせの羽根

尾に住んでいる。この上町周辺は、田畑・山林と続き長閑な田園風景が広がっている。近くに沼代の「桜の馬場」という桜の名所がある。又、上町から山越えをして国府津に抜ける道もある。遠くに丹沢山塊をも望むこともできる。

この辺りを通るたびに、千年も昔の平安の頃からの歴史を感じ、武家政権を誕生させた震源地の一つであることなどに想いつのらせている。そのためにこの場所は私の好きな散歩道なのである。

(小田原市羽根尾在住)

『太平記』が伝える「南の方」

大塔宮護良親王は、後醍醐天皇の皇子。尊氏や父の後醍醐天皇と反目し、尊氏の弟足利直義の監視下に置かれ鎌倉で殺される。護良親王の室「南の方」は悲嘆にくれながら京都に上っていく。その様子を『太平記(第十三巻)』は次のように語っている。

(護良親王の)御首を搔んとしければ、宮御首を縮めて、刀のさきをしかとくはえさせたまふ。(中略)さる程に御介錯のために、御前に候はれける南の御方、此有様を見たまつて、あまりの恐しさと悲しさに、御身もすくみ、手足もたたましましけるが(中略)南の御方は、やがて御髪おろされて、泣々京へ上りたまひけり。(後略)

『新潮日本古典集成』

「隠居」の大塔さん

大塔ご夫妻の話を聞く

はじめに

妻の叔母の苗字は大塔(だいとう)という旧橋町の上町(かのまち)に住んでおられる。以前から大塔宮護良親王と関係があると聞いていた。

詳しい話が聞きたくなり、妻とお宅を訪問させてもらった。二年前の夏のことである。

叔母 上町まで良く来てくれたね。ここは山と畑ばかりだから星がとても良く見えてね。横浜から来た家のお嫁さんは大喜び。家の前のなだらかな岡の斜面は、以前はサカタの苗の下請けでラナンキュラスの花を植えていたのよ。花が咲くと、それはそれは綺麗だったけれど、サカタが止めてからは玉葱畑。お爺さん(夫)と体の様子を見ながら、作ってるの。岡の向こうは国府津。ここから見える限りは大塔家の土地だよ。昔は大塔家の土地はもっと広がってね。今は百歳になる廣宣寺の先代住職さんが小田原市役所に勤めていた時は、大塔家の土地だけを通して、国府津の駅まで毎日、歩いて行っていたそうですよ。その道を、この辺の人は酒匂道と呼んでいましたねえ。

―廣宣寺というのは大塔家が建てたと聞いていますけど。

叔母 そのようですよ。今は新幹線の向こうにあります。昔は新幹線のこちら側に本堂があったそうです。廣宣寺ははじめ一町四方の広大な境内で本堂の他に幾つかの建物があったらしいですよ。何時のことだったか、火事で焼けてしまった。焼けなかったら、護良親王と大塔家のつながりが分かるものが残っていたでしょうにね。それで仮の本堂で凌いでいた時に、関東大震災で倒れて、昭和のはじめに倒れた材料でまた仮りの本堂を建てた。本堂を建てる予定地を小作に出していたけれど戦後の農地解放で手放すことになってね。今の本堂が落慶したのは、平成十三年ですよ。

右に古墳みたいな小さな山が見えるでしょ。そこに大塔家で屋敷神と言ってる大塔稲荷があるんですよ。最近まで、毎年二月初午の日には稲荷講をしていました。だけど、今のお稲荷さんは新しく作った形だけの物でね。昔の大塔稲荷は山崩れで埋まってしまったの。二十年ぐらい前業者がその場所の土砂を削って運び出していたので、昔の大塔稲荷が

出てくるかと楽しみにしていたんだけどね。もし見つかったらば、護良親王と大塔家とのつながりを示すものが何か出てきたかもしれないのね。

さあ、暑いから中に入って入って。

―玄関の上がり框も欄間の彫刻も、床柱も立派ですね。

叔父 床柱はね、石梨の木。欄間は梅、この家の材木はみんな我が家の山の木を斧と鋸で伐りだしたものだ。昔はチェンソーなんてなかったからね。

叔母 さあさあ、ゆっくりしてね。家の桜の花の塩漬けで作ったゼリーですよ。

―早速ですけど、大塔家と護良親王の関係について、何かお話しを聞かせていただけませんか。

叔父 そうだねえ。昔はこの付近は酒匂道沿いの宿場でね、湿地というか湖の畔で、向こう岸に船で渡ることもあったらしい。我が家は宿屋だったそうです。苗字を「南」といってね。護良親王が亡くなった後のことらしいんです。

が、親王さんの子を身ごもった奥さんが京に行く途中、この近くで産気づいた。それを我が家でお世話したのです。そのお礼として大塔という苗字をいただき、また広大な土地を持つことを許されたと聞いています。お爺さん、お婆さんや廣宣寺の先代住職に聞いて

た話です。その子どもはどうなったって？分らないねえ。

大塔家はその子供の血を引く末裔だなんていう人もいるけど、私には分からない。えっ、大塔家は護良親王を逃がすために作った身代わりの末裔説なんて話もあるのかい。それは初耳だ。とにかく昔のことで、大塔家も菩提寺の廣宣寺も火事で焼けたりして、大塔家と護良親王の関係が分かるような古い資料が何も残っていないんだ。

そうそう、この本に我が家のことが出ています。

―『姓氏家系録』ですか。厚い本ですね。

「当大塔家は当地草創の大塔姓一門の旧家にして家紋『表丸右三階松』と『裏揚羽蝶』を用い、屋号『隠居』と親称されて近在に知られる。古く出自を辿ると大塔の宮様の末流と伝わり、由緒深き家柄と口伝される」と書いてありますね。

叔父 これは以前、小竹の竹見龍男さんが我が家のことを調べに来られたことがあり、それを基に書かれたんだと思いますよ。でもね、こうやって興味を持って昔のことを調べてくださる人がいて有り難いと思いますよ。

―家紋が二つある家って、由緒がある家ということですね。

叔母 お役に立つかどうか分か

らないけど、家にある古い掛け軸なんかを出しておいたから見てね。昔は刀や槍や長刀なんかを床の間に飾っていたけど、維持するのに費用がかかりすぎて、もう止めました。何しろ刀を一寸磨くのに、十八万円なんていわれちゃね。帯刀を許された家だったのですね。沢山掛け軸がありますね。

叔母 大方はご先祖さんが身延山のお坊様に書いていただいた髭曼茶羅。だけど一つだけ家の家系を書いたのがありますよ。これがその掛け軸。

「延宝三年乙卯九月廿六日
蓮常院利解品日信士」

次は享保が四代、その次が元文、明和、享保と続いてきて、私の曾じいさんの関太郎が昭和三年没、それに妻のいと。じいさんの由太郎と妻のくに。お袋のテル子と昭和三十年没。親父は浦吉で昭和五十八年に亡くなってる。

この曾じいさんというのがやんちゃだったという話だね。開国して自由に動きまわれるようになる、よく海外に行ったらしい。遊び過ぎて暮らしに困ったこともあったらしい。

掛け軸の写真？どうぞどうぞ

撮ってくださいよ。我が家は日蓮宗なので、上に書かれているのは長い髭が垂れたような髭曼茶羅、字曼茶羅ともいう。ただこの曼茶羅も下のご先祖さんの戒名を記す枠も印刷か版画だね。誰かが亡くなると、その度にこの欄に名前が書かれるってわけ。それで家ではお盆になると、これを床の間にかけて、ご供養してもらう。

他の曼茶羅も見てみて下さい。これはいつのものかね。

「宝暦甲戌七月十五日

俗名 大塔新三郎」

—ということは、一七五〇年頃に大塔新三郎さんというご先祖様が、身延山にお参りして、お坊さんに書いてもらったということかな。立派な髭曼茶羅ですね。

叔父 そういえば廣宣寺のお坊さんに「これは貴重です」と言われたことがある。書いたお坊さんが偉かったのかな。

—こういうものが沢山残っているのは、大塔家が信心深くて、裕福だったということですね。

護良親王のお墓が鎌倉宮の近くにありますけれども、ご家族でお詣りされたことはありませんか。

叔母 十年以上前になるけど、一度行きましたよ。私たち夫婦と、弟夫婦、息子夫婦の六人ですね。一応、私たちに関係があると言われる護良親王だから、行こう行こうと思っていて、やっとな。鎌倉宮

の裏には護良親王が閉じ込められていた土牢がありました。お墓は鎌倉宮の近くにあるけれど、案内板もなくてね、お参りしているのは、私たちだけ。

狭くて急な階段を百七十段くらい上ってようやく着いたけど、持っていたお花をあげて、お線香をたきたかったけど、それはかなわなかった。護良親王ってのは武士みたいに気性が荒い人だったらしいね。

—今日は貴重なお話を聞かせていただき有り難うございました。

叔母 もう帰るのかい。お土産に酢飯のタケノコご飯を作っておいたから持っていくてね。玉葱と馬鈴薯も段ボールに入れておいたよ。そうそう町中じゃ、もうお盆でしょ。みそ萩が咲いているから、持つておゆきよ。今日は来てくれて本当に有り難う。

—こちらこそ有り難うございました。お土産までいただいた。

帰宅して

私が叔母夫妻の話是非書き残しておきたいと思ったのは、大塔家が（口伝ではあるにしろ）護良親王と何らかの関係がありそう、だということより、むしろ叔母夫妻の心優しさ、謙虚さだ。

お二人に会ってから気になることが一つ出てきた。護良親王と

関係がある女性が仮にここを通ったとして、中世の時代にこの近くを通る古道があったのだろうか？竹見龍雄さんに『中村郷』という本があり、その「相模の小総駅」の項に関連する内容が出ている。これによれば、「箱根路—国府津—上町」という官道があったようで、もしかしたら「酒匂道」はこの官道だったのだろうか？私は勝手に想像してしまう。

それに加えて、の疑問がわく。鎌倉から京に行くのに海岸沿いでなく、何故内陸部の「酒匂道」を経て国府津へ向かうのか。

それに「昔、上町付近で旅人が船で湖を渡った：」。いったいそれはどういうこと？

これは、もう私の手には負えない。地元の人に教えてもらおう他に、と「酒匂道」を調査しておられる榎本保美さん（史談会会員）に上町付近を案内していただいた。

それが縁で榎本さんをはじめ、地元の梅田仙吉さん、居原田邦男さん、米光道子さん、脇松雄さんに二、三六号から今号にわたり旧橘地区の歴史について書いていただいた。二年前は旧橘地区の土地・歴史を全く知らなかったが、お陰様で私もガイドが出来そうな気分になって来た。関係者に深く感謝致したい。

(松島記)

(小田原史談会1月の研修会ご案内)

池上本門寺に . . . 宗派を超えて . . . みんなで初詣しよう

日時； 平成27年1月20日(火) 小雨決行
 集合； 小田原駅西口 午前7時50分 出発 午前8時
 帰着； 午後6時30分頃
 参加費； 9,000円 (当日、現金で集金します)
 コース； 小田原駅 — 六義園 — 昼食(参加費から) — 日本民藝館 —
 池上本門寺 — 小田原駅 (貸切バスで移動)
 申し込み； 平成26年10月29日(水) 午後1時～午後8時
 30日(木) 午前9時～午後6時
 電話 0465-22-1076 内田まで

キャンパスおだわら学習講座《公募型市民企画講座》

歴史講座 『小田原史談会セミナー』 第7回

日 時：11月8日(土) 午前10時～12時
 場 所：小田原市民会館 6階第6会議室 (開催場所は第6回と変わります。ご注意ください)
 講 座：『明治・大正期の小田原別荘群をあるく』 講 師：下山 峰司 氏
 申込先：☎ 33-1890 (小田原市生涯学習センターけやきの会) 定員 50名 (先着順)
 費 用：500円(資料代含む) *前回予約の方でキャンセルの場合は電話連絡をお願いします。

落穂集

青木さんに「一所不在」の人、安居院庄七について書いていただきました。報徳の伝道者としてよりむしろ「襦袢を着て狐貉を恥じ」なかった安居院庄七の生き様に魅せられます▼北条氏が持っていた「酒伝童子絵巻」は現在サントリー美術館にあります。その間様々なドラマがあったはずで興味がありませんでした。石井さんがそれを明らかにしてくれました▼西之丸、小川町、六本木、芝と大久保家の上屋敷は移っていききました。前号の中村さんの力作を繙きながらお読み下さい▼明治末小田原に住んだ作家斎藤緑雨の日記等でその頃の小田原の様子を中條さんが描きます。ひねくれ者といわれた緑雨を看取ったタケの美しい写真が印象的です▼浅田兄弟の敵万助は地元(茨城郡大洗町)の人に「万助さん」と呼ばれて親しまれていたことを伝え「孝貞義鑑」は終わりました。約四年にわたる連載、鈴木さんに深く感謝します▼三回にわたり掲載してきた旧橋地区の歴史シリーズ、今号は米光さんに「久成寺」、脇さんに「大塔家」について書いていただき終了とします。歴史の宝庫旧橋地区、機会があれば再度取り上げたいと思います▼今後も小田原史談をご愛読ください。

「小田原史談」原稿募集

論考・紀行・証言等の原稿をお待ちしております。お問い合わせは左記へ。

小田原市南町四・一二四

電話 〇四六五・二三八六三五

松島俊樹

特別賛助会員

紳士服の **アメリカヤ**税理士法人 **報徳会計****伊勢治書店** **かまぼこ**(株) **オクツ薬局** **小田原ガス****小田原報徳自動車****かまぼこ籠 清****かみやま小児科クリニック****興電社**創業四百年有余
 **料理茶屋 小伊勢屋**(有) **小松石材店****COMTEC コムテック株式会社****さがみ信用金庫**手打うどん 小田原城趾前 **田毎**のれんと味 **あさる海****茶半家具株式会社****ちんぎょう本店**割烹料理
うなぎ **鳥かつ楼****和菓子菜の花****杉崎茂法律事務所****平井書店**(有) **古屋花店****株式会社 報徳**建築金物 家庭金物 (株) **星崎仲吉商店****本多時計店**学生専科  **マルク**曾我の梅干
塩辛・かまぼこ **美の政**(株) **アルファ**小田原史談(年四回発行)
創刊昭和三十六年一月
会創立昭和三十年七月

禁無断転載

振替

年会費 普通会員三千円
〇〇二二〇二二六四三三六
小田原史談会